NECパーソナルコンピュータ
PC-9800シリーズ

NEC

Software library

MS-DOS® 6.2

インストールガイド

Software library

MS-DOS® 6.2

インストールガイド

ご注意

(1) 本書の内容の一部または全部を、無断で他に転載することは禁止されています。
(2) 本書の内容は、将来予告なしに変更することがあります。
(3) 本書の内容は、万全を期して作成しております。万一、ご不審な点や誤り、記載もれなどお気づきの点がありましたら、ご連絡ください。
(4) 運用した結果の影響については、(3) 項に関わらず責任を負いかねますのでご了承ください。

Microsoft、MS、およびMS-DOSは米国Microsoft Corporationの登録商標です。
Windowsは、米国Microsoft Corporationの商標です。
i386は、米国インテル社の商標です。
SEDIT Ver. 2.00およびMAXLINK-LITEは、メガソフト株式会社の商標です。
ウイルスバスター98は、株式会社リンクの商標です。
Arcada Backupは、米国Arcada Software Inc.の商標です。
PP II は、英国Roundhill Computer Systems, Ltd. および株式会社LIFEBOATの登録商標です。
WINDOWS CONTROL PALETTEは、米国Blaise Computing Inc.の登録商標です。
ウイルスバスター98は、以下のプログラムを使用して開発されています。

- PP II
- WINDOWS CONTROL PALETTE

輸出する際の注意事項

本製品（ソフトウェア）は、日本国内仕様であり、外国の規格等には準拠しておりません。本製品は日本国外で使用された場合、当社は一切責任を負いかねます。また、当社は本製品に関し海外での保守サービスおよび技術サポート等は行っておりません。

CB512D

はじめに

● MS-DOS 6.2の動作環境

MS-DOS 6.2をご使用になるには、お使いのPC-9800シリーズが次の条件を満たしている必要があります。この条件を満たさない場合は、MS-DOS 5.0A以前のMS-DOSをご利用ください。

・対応機種
386SX以上のCPUを搭載した機種（ただしPC-9801Pでは動作しません）

・必要最小メモリ
1.6Mバイト以上

・必要な外部記憶装置とその空き容量
固定ディスク（空き容量20Mバイト以上）



フロッピィディスクドライブが1台で、RAMドライブが搭載されていない機種では、MS-DOS 6.2のフロッピィディスクへのインストールはできません。

● MS-DOS 6.2の製品構成

MS-DOS 6.2には、次のような製品があります。

・基本機能セット（本製品）

［媒体］
MS-DOSシステムファイル
各種コマンド
AIかな漢字変換
日本語入力辞書（約5万語）

［マニュアル］
インストールガイド
ユーザーズマニュアル

・拡張機能セット

［媒体］
開発ツールコマンド
日本語入力辞書（約8万語）

［マニュアル］
ユーザーズリファレンスマニュアル
プログラマーズリファレンスマニュアル Vol.1
プログラマーズリファレンスマニュアル Vol.2
プログラマーズリファレンスマニュアル Vol.3
プログラム開発ツールマニュアル
日本語入力ガイド

また、基本機能セットには複数の方がご使用いただけるライセンスパックを用意しています。

■ 本書の目的と構成

お求めになったMS-DOS 6.2（以下MS-DOSまたはMS-DOS 6.2）は、固定ディスクにコピーし、使える状態にする必要があります（これをインストールと呼びます）。

また、別に購入されたアプリケーションソフトを固定ディスクにインストールするときにも、さまざまな設定や処理が必要です。

本書は、これらの作業をまとめたマニュアルです。



独自に作成したデータファイルなどの重要なファイルは、適当な間隔でバックアップすることをお勧めします。固定ディスクの内容をバックアップする方法は、『MS-DOS 6.2　ユーザーズマニュアル』の「発展編 第1章 ファイルをバックアップ／復元する」を参照してください。

・第1章　MS-DOS 6.2のインストール

この章は、お求めになったMS-DOS 6.2のインストール用ディスクから、通常お使いになるフロッピィディスクや固定ディスクなどにインストールする手順を説明しています。また、Windows 3.1のアップグレードの手順についても説明しています。

・第2章　アプリケーションのインストール

この章は、すでにお使いのアプリケーションソフトや、新たに購入したアプリケーションソフトをインストールし、MS-DOSから使用できるようにするまでの手順を説明しています。

・第3章　アプリケーションの実行

インストールしたアプリケーションを、DOSシェルやコマンドプロンプトから実行する方法を説明しています。

・第4章　MS-DOS 6.2をお使いになる際の注意

MS-DOS 6.2をお使いになる際に必要な注意事項について説明しています。

● その他のマニュアル

また、この『MS-DOS 6.2 基本機能セット』には、本書の他に次のようなマニュアルが添付されています。

・『MS-DOS 6.2　ユーザーズマニュアル』

市販のアプリケーションを使う際に必要なMS-DOS 6.2の情報をまとめたマニュアルです。MS-DOSを初めて使う方のために、MS-DOSの機能の中から特に大事な部分を選択して解説しています。

● 必要なものの確認

お買い上げいただいた「MS-DOS 6.2 基本機能セット」には、MS-DOS 6.2の「システムディスク」8枚、および2冊のマニュアルが含まれています。ご使用の前にこれらのものがそろっているか確認してください。

番号	構成品	チェック
	[フロッピィディスク 8枚]	
1	MS-DOS 6.2 システムディスク#1	□
2	MS-DOS 6.2 システムディスク#2	□
3	MS-DOS 6.2 システムディスク#3	□
4	MS-DOS 6.2 システムディスク#4	□
5	MS-DOS 6.2 システムディスク#5	□
6	MS-DOS 6.2 システムディスク#6	□
7	MS-DOS 6.2 システムディスク#7	□
8	MS-DOS 6.2 システムディスク#8	□
	[マニュアル 2冊]	
9	インストールガイド	□
10	ユーザーズマニュアル	□
	[その他]	
11	ソフトウェア登録カード	□
12	Microsoftユーザーカード	□
13	マニュアル購入券	□
14	払込用紙	□
15	封筒	□
16	Welcome to VirusBuster98	□

■ MS-DOS 6.2の強化点概要

MS-DOS 6.2で強化された点について、概要を紹介します。

● ファイル圧縮機能 （DBLSPACEコマンドの追加）

アプリケーションソフトやデータファイルの巨大化に対応するため、ファイルの圧縮機能(以下DoubleSpace)を新たにサポートしました。この機能は、ファイルを圧縮することにより、ドライブの容量を本来の容量より多く利用できるようにするものです。たとえば、ドライブ容量が120Mバイトの固定ディスクで、1.5倍の圧縮効率が得られた場合には、あたかも180Mバイトのドライブ容量があるように利用することができます。



この機能は約32Mバイト以上のドライブ容量があれば利用できます。ただし、物理セクタ長256バイトの場合を除きます（お使いの固定ディスクによって、圧縮可能なドライブ容量の下限は変わります）。



インストールする固定ディスクの領域サイズとDoubleSpaceの関係は次のようになります。

・領域サイズ8～19Mバイトの場合
インストール時にDoubleSpaceを実行するためのファイルはコピーされません。したがってDoubleSpaceは実行できません。

・領域サイズ20～31Mバイトの場合
インストール時にDoubleSpaceを実行するためのファイルはコピーされますが、DoubleSpaceで圧縮するためには領域サイズが32Mバイト以上必要なため、MS-DOS 6.2をインストールした領域そのものを圧縮することはできません。

・領域サイズ32Mバイト以上の場合
インストール時にDoubleSpaceを実行するためのファイルはコピーされ、MS-DOS 6.2をインストールした領域そのものも、DoubleSpaceで圧縮できます。

なお、インストール時に32Mバイト以上の領域を確保しても、お使いの固定ディスクによっては圧縮できない場合があります。圧縮を行う場合には、40Mバイト以上の領域を確保することをお奨めします。

● ファイル再配置 （DEFRAGコマンドの追加）

固定ディスク上に分散して保存されているファイルを、連続的に再配置することにより、ファイルへのアクセススピードを高速化します。また、ファイルの誤消去や破壊があった場合の修復率を高めます。

● ディスクの検査と修復 （SCANDISKコマンドの追加）

ディスクの検査、診断、修復を対話式に行います。お使いのコンピュータシステムのファイル運用の安全性を高めます。

● メモリの使用状況の最適化 （MemMakerコマンドの追加）

MemMakerコマンドは、メモリの使用状況を最適化し、デバイスドライバや常駐プログラムをUMBに移動させ、利用できるコンベンショナルメモリを増やします。

● 大容量データのバックアップ（Arcada Backupの追加）

大容量化する固定ディスクドライブのデータを、専用のテープやフロッピィディスクなどに高速にバックアップするコマンドです。

● UNDELETEコマンドの強化

UNDELETEコマンドは、誤って削除してしまったファイルを復活させるコマンドです。

● ウイルス対策（ウイルスバスター98の追加）

VB98コマンドは、コンピュータウイルスの侵入を検出するためのものです。現在までに発見されている海外ウイルスを含め、約3,500種類のウイルスを検出する能力を持っています。

● 簡易通信機能（MAXLINK-LITEの追加）

2台のコンピュータをケーブルで接続し、一方のコンピュータのディスクにアクセスできるようにするコマンドです。

● CHOICE、DELTREE、MOVE、MSDコマンドの追加

CHOICE、DELTREE、MOVE、MSDコマンドが新規に追加されました。

・CHOICEコマンド

バッチプログラムで、選択を行う際に使用するコマンドです。

・DELTREEコマンド

ディレクトリを、その中に含まれるファイルごと削除するコマンドです。DELTREEコマンドを使うことによって、先にディレクトリ内のファイルを削除してから、ディレクトリを削除するといった煩雑な作業は不要になります。

・MOVEコマンド

ファイルの移動を行うコマンドです。これまでは、ファイルの移動を行うには、COPYコマンドとDELコマンドを組み合わせて使うことが必要でした。しかし、MS-DOS 6.2からはMOVEコマンド一つでファイルを移動させることができるようになります。

・MSDコマンド

お使いのコンピュータが、現在どのような状態で動作しているかを表示するコマンドです。メモリの利用状態や組み込まれたデバイスドライバ、接続しているドライブに関する情報などを調べることができます。

● Windows 3.1用コマンドの追加

MS-DOS 6.2には、Windows 3.1でご利用いただけるコマンドがサポートされています。

・ウイルスバスター98

WVB98コマンドは、コンピュータウイルスの侵入を検出するためのWindows版のコマンドです。現在までに発見されている海外ウイルスを含め、約3,500種類のウイルスを検出する能力を持っています。

・MWUNDELコマンド

MWUNDELコマンドは、誤って削除してしまったファイルを復活させるコマンドです。Windows版では、MS-DOS版ではサポートされていない“ディレクトリの復活”がサポートされています。

・DoubleSpace情報
圧縮したドライブの情報を表示する機能です。ファイルマネージャのメニューバーにプルダウンメニュー“ツール”が追加され、この中に登録されています。

● クリーンブートとインタラクティブブート

MS-DOSの起動時、コピーライトメッセージを表示している間にf·5キー（クリーンブート）、またはf·8キー（インタラクティブブート）を押すと、MS-DOSの起動方法を指定することができます。

● COMMAND.COMパスの指定機能

MS-DOSの起動時、起動ドライブ上のルートディレクトリ、またはSHELLで指定されたパスにCOMMAND.COMが見つからない場合に、自動的にパスの検索を行います。また、それでも見つからないときは、直接COMMAND.COMが存在するパスを入力することができます。

● その他

・ディスクキャッシュの強化（SMARTDriveの強化）
MS-DOS 5.0で追加されたSMARTDriveは、固定ディスクのリードキャッシュのみをサポートしていましたが、MS-DOS 6.2からは、CD-ROM、フロッピィディスクのリードキャッシュ、および固定ディスク、フロッピィディスクのライトキャッシュをサポートします。

・XMSの機能強化（HIMEM.SYSの強化）
HIMEM.SYSの強化により、MS-DOSとWindowsでの64Mバイトを超える拡張メモリの利用をサポートします。

・MSCDEXコマンドの標準添付
MS-DOS 6.2からは、機能強化されたMSCDEXコマンドが標準添付となりました。

■ 本製品を使うにあたっての注意事項

・市販のソフトウェアの中には、動作する際に特定のバージョンの日本語MS-DOSを必要とするものがありますのでご注意ください。

・『MS-DOS 6.2 基本機能セット』のシステムディスクに入っているコマンドは、圧縮されていますので、そのままではご利用になれません。必ず、本書をご覧になりながらインストールを行ってください。

・次の条件に該当するソフトウェアは、正常に動作しない可能性があります。

コピープロテクトがかけられたソフトウェア
MS-DOSやハードウェアの情報を直接参照しているソフトウェア
MS-DOS 6.2がサポートしている以外の方法で拡張メモリを利用しているソフトウェア

・MS-DOS 6.2で新しくサポートされたコマンドや機能を利用した場合、以前のバージョンのMS-DOSに比べ、コンベンショナルメモリ（メインメモリとも言います）を大幅に消費することがあります。この結果、これまでお使いのアプリケーションが起動できなくなる可能性も考えられます。あらかじめコマンドや機能が消費するメモリと、お使いのアプリケーションの動作に必要なメモリの大きさなどを調べた上でご利用ください。

また、次のような方法でコンベンショナルメモリを増やすことができます。

不要なデバイスドライバや常駐コマンドを組み込まない
DOSシェルを終了して、コマンドプロンプトから実行する

・PC-H98シリーズでは、次の点に注意してください。

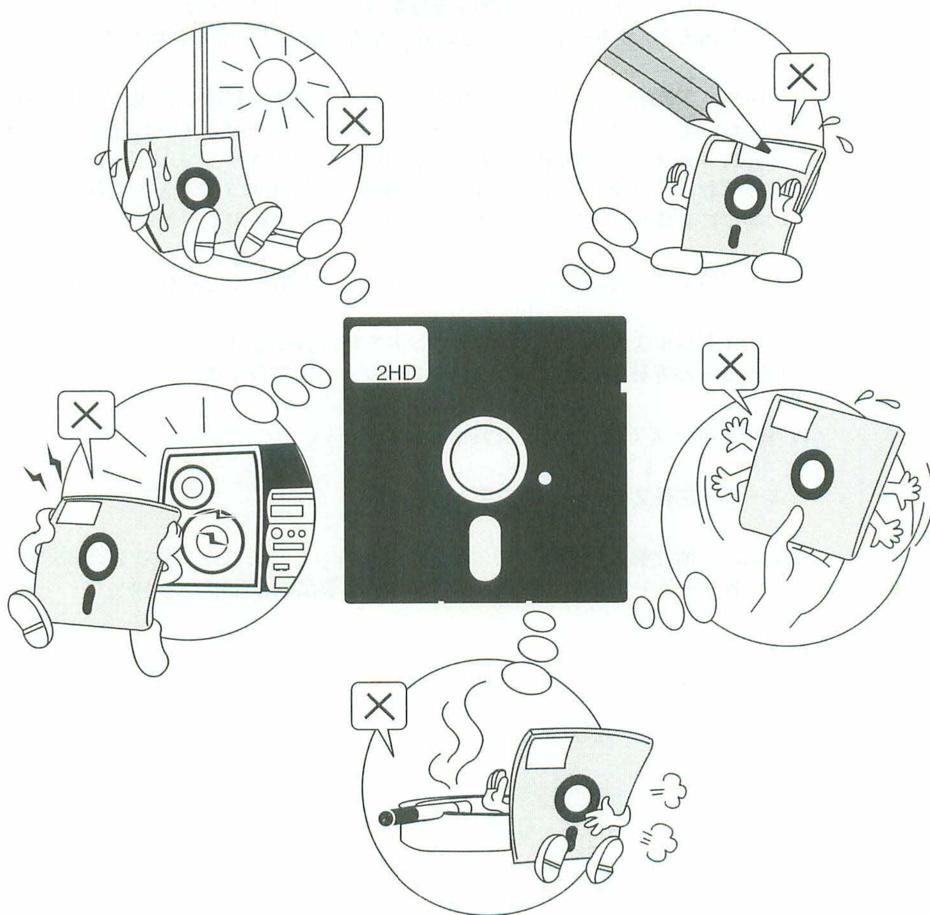
ユーザー定義文字　　全角文字219文字のみ

・本製品は、他社製の周辺機器では動作確認を行っていません。他社製の周辺機器をお使いの場合、各メーカーに動作の可否を確認の上、本製品をご使用ください。

■ フロッピィディスク使用上の注意

磁気、熱、傷はフロッピィディスクの大敵

・大出力のスピーカーは磁気を発生するので、ディスクを近づけないでください。
・ディスクをあつかうときは磁気ネックレスなどを身に付けないでください。
・日の当たる場所、極端に高温となる場所にディスクを保管しないでください。
・ディスクの中身のプラスチックシートには手を触れないでください。
・ディスクにホコリやタバコの灰を落とさないでください。
・ボールペンなどペン先の硬いものでラベルに字を書かないでください。



ディスクドライブのランプ点灯中は取り出さない

フロッピィディスクドライブのランプが点灯しているときは、フロッピィディスクへの読み書きが行われています。ランプ点灯中はフロッピィディスクを抜いたり、パソコンの電源を切ったりしないでください。

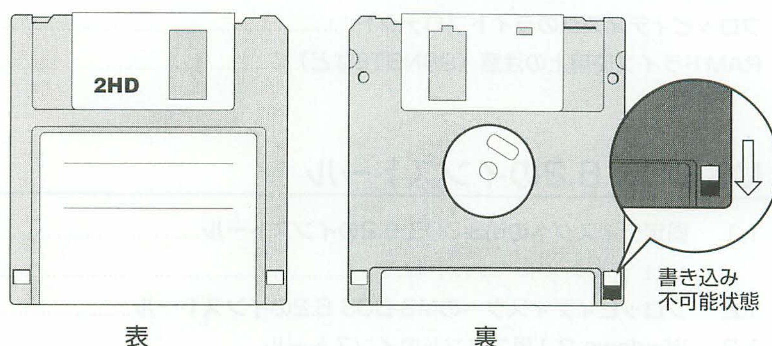
■ フロッピィディスクのライトプロテクト

オリジナルのシステムディスクなど、大事なフロッピィディスクにはライトプロテクト（書き込み禁止）をしておきましょう。

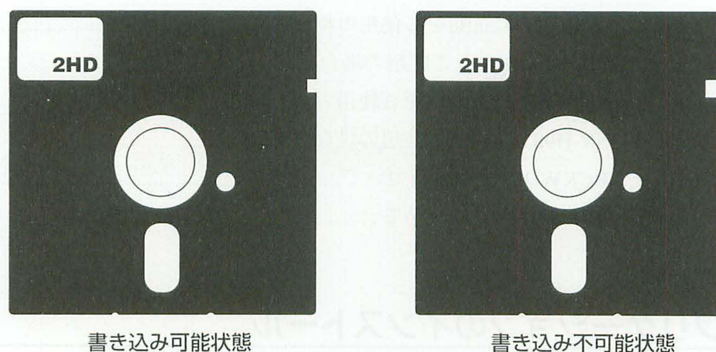
ライトプロテクトをしたフロッピィディスクは、データを読み込むことはできても、書き替えたり削除したりはできなくなりますから、中身を誤って消すなどの事故が防げます。

ライトプロテクトの仕方

3.5インチ



5インチ



※データディスクなど、セーブ用のディスクにはライトプロテクトをしないでください。

■ RAMドライブ使用上の注意 （98NOTEなど）

98NOTEのRAMドライブに保存した内容は、充電せずに長期間放置しておくと消えてしまいます。

・重要なソフトウェアやデータはフロッピィディスクに保存してください。

目 次

第3章 アプリケーションの実行

第4章 MS-DOS 6.2をお使いになる際の注意

第　1　章

MS-DOS 6.2 INSTALL GUIDE

ONE

MS-DOS 6.2のインストール

この章では、お求めになった『MS-DOS 6.2基本機能セット』に含まれているMS-DOSを、フロッピィディスクや、固定ディスクにコピーして通常使えるようにするまでの準備の手順を説明します。このような準備を、MS-DOSの“インストール”と呼びます。また、バージョン5.0A以前のMS-DOSシステムをお使いの場合は、そのシステムにMS-DOS 6.2を転送し、そのまま使える状態にすることもできます。これを“アップグレード”と呼びます。さらにWindows 3.1をお使いの場合は、MS-DOS 6.2のインストールと同時にWindows用コマンドのインストールも行うことができます。

本セットには、MS-DOSのインストール用に『システムディスク』が添付されていますが、そのままではご使用になれません。本章で説明する手順にしたがって、ふだんお使いになる固定ディスクにインストールしてお使いください。

1.1 固定ディスクへのMS-DOS 6.2のインストール

MS-DOS 6.2をお使いになるためには、あらかじめMS-DOS 6.2を固定ディスク、フロッピィディスクなどにインストールする必要があります。ここでは、MS-DOS 6.2の“インストールコマンド”（INSTDOSコマンド）を使い、固定ディスクでMS-DOS 6.2を使うために必要な作業の手順を解説しています。3.5インチ光ディスクへのインストールも、固定ディスクへのインストールに準じてください。なお、MS-DOS 6.2をフロッピィディスクで使うための手順は、「1.2　フロッピィディスクへのMS-DOS 6.2のインストール」を参照してください。

●インストール方法

INSTDOSコマンドでMS-DOS 6.2をインストールする方法には、次の2つがあります。

1. すでにMS-DOS 5.0A、MS-DOS 5.0A-H、MS-DOS 3.3Dなどを固定ディスクでお使いになっている場合に、既存のMS-DOSシステムにMS-DOS 6.2システムをインストールします。このインストール方法は、アップグレードとも呼びます。

2. 新たに領域（MS-DOSのシステムがインストールされていない既存の領域を含む）を確保して、MS-DOS 6.2をインストールします。

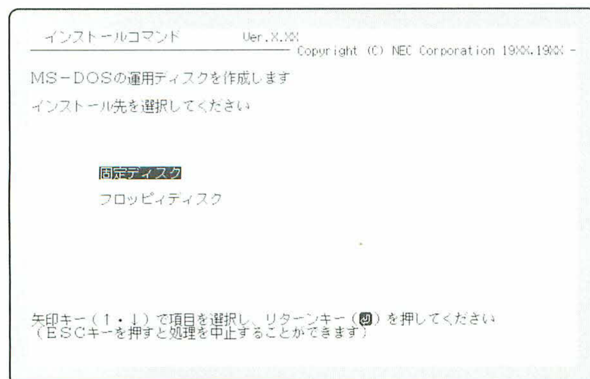
途中で一部異なる箇所がありますが、2つとも手順はほとんど同じです。
なお、アップグレードに際しては20Mバイト以上の空き容量が必要です。20Mバイト未満の場合、MS-DOS 5.0A相当機能のみのインストールになります。

1.1.1 インストールの手順

ここでは固定ディスク（3.5インチ光ディスク）にMS-DOS 6.2をインストールする際の手順を説明します。

●固定ディスクの初期化と領域の確保

① まず、『システムディスク #1』をドライブに挿入し、フロッピィディスクから起動してください。『システムディスク #1』で起動すると、まずインストールコマンドが自動実行されるようになっています（3.5インチ光ディスクドライブや光ディスクを接続している場合は、さらに“固定ディスク”という選択肢のほかにそれぞれ“3.5インチ光ディスク”、“光ディスク”という選択肢が表示されます）。





インストールコマンドのキー操作は次の通りです。

[↑][↓]キー	反転表示の移動
[↵]キー	選択
[ESC]キー	実行の中止（もしくは終了）

複数の選択肢がある場合は、[↑][↓]キーで希望の選択肢を選び、[↵]キーで選択してください。ただし、[ESC]キーを押しても、インストールコマンドが実行している作業の種類によっては、中止できないものもあります。

② 固定ディスクを[↑][↓]キーで選択して[↵]キーを押してください。装置の初期化画面が表示されます。
すでにお使いの固定ディスクを初期化することなく、MS-DOS 6.2システムをインストールする場合は［いいえ］を選択し、「● 確保済みの領域へのインストール」を参照してください。



装置全体の初期化画面で［はい］を選択した場合、既存のデータはすべて失われますので注意してください。

```
 インストールコマンド        Ver.X.XX
──────────────────────────── Copyright (C) NEC Corporation 19XX.19XX -
固定ディスクの準備

装置全体を再初期化しますか

注意  初期化すると固定ディスクの内容はすべて失われます

システム名      状 態     ｻｲｽﾞ   BOOT
MS-DOS 5.0A     ｱｸﾃｨﾌﾞ    225MB   可
MS-DOS 5.0A     ｱｸﾃｨﾌﾞ    100MB   可




矢印キー（←・→）で項目を選択し、リターンキー（↵）を押してください
（ESCキーを押すと前の画面に戻ります）
はい  いいえ
```

③ “装置全体を初期化しますか”に対して［はい］を選択すると、次の画面が表示されます。

```
 インストールコマンド        Ver.X.XX
──────────────────────────── Copyright (C) NEC Corporation 19XX.19XX -
固定ディスクの準備


MS-DOSで確保する容量を指定して、リターンキー（↵）を押してください


確保可能な最大容量は 325メガバイトです



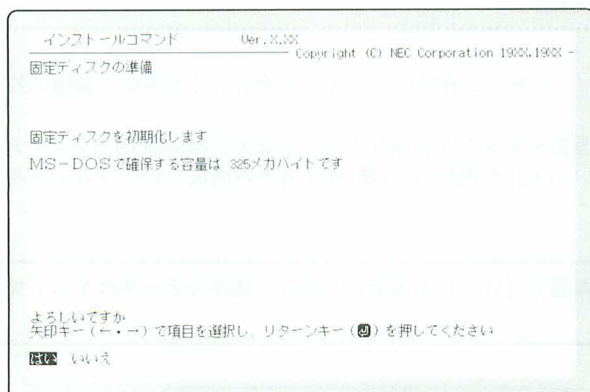
確保容量=325  メガバイト（32メガバイト以上を指定してください）
（ESCキーを押すと前の画面に戻ります）
```

確保する領域の大きさを（容量）を入力し、[↵]キーを押してください。デフォルトは、その時に確保できる最大容量になっています。20Mバイト以上（DoubleSpaceを使用して、MS-DOSをインストールしたドライブ自身を圧縮する場合は32Mバイト以上）の領域を確保してください。



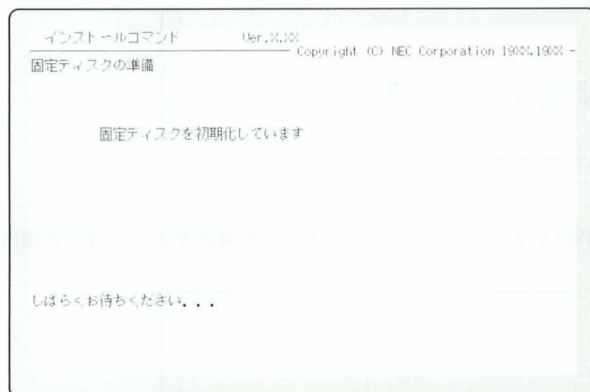
DoubleSpaceで圧縮を行う場合、インストール時の画面で32Mバイト以上でDoubleSpaceが使用可能と表示される場合でも、お使いの固定ディスクによっては、32Mバイトではご使用できない場合があります。圧縮を行う場合は、40Mバイト以上の領域を確保することをお奨めします。

④ 指定した確保容量を確認する画面が表示されます。



表示されている容量でよければ、[はい] を選択して⏎キーを押してください。[いいえ] を選択して⏎キーを押すと、手順③に戻りますので、もう一度必要容量を入力し直してください。

⑤ 領域の確保が始まります。



⑥ 固定ディスクの準備が終了すると、自動的にコンピュータが再起動します。フロッピィディスクドライブに挿入されている『システムディスク #1』から再び起動して、インストールコマンドが実行されます。



このとき、ドライブからフロッピィディスクを抜かないでください。

以降は「● システムファイルの転送」を参照し、作業を進めてください。

● 確保済みの領域へのインストール

固定ディスクにシステムファイルの転送を行います。固定ディスクを初期化してインストールした場合と、旧バージョンのMS-DOSをアップグレードした場合では、作業途中のメッセージと手順が異なります。

① MS-DOS 6.2をインストールする領域を[↑][↓]キーで選択し、[↵]キーを押してください。

```
  インストールコマンド          Ver.X.XX
                                  Copyright (C) NEC Corporation 19XX,19XX -
固定ディスクの準備

インストールする領域を選択してください

システム名        状  態    サイズ   BOOT
MS-DOS 5.0A       アクティブ  225MB    可
MS-DOS 5.0A       アクティブ  100MB    可

領域を新規に作成するときは、『未使用領域』を選択してください
矢印キー（↑・↓）で項目を選択し、リターンキー（↵）を押してください
（ESCキーを押すと前の画面に戻ります）
この領域はMS-DOS6.2の全てのファイルがコピーされます・ダブルスペースによる圧縮が可能です
```

領域が20Mバイト未満の場合は、MS-DOS 5.0A相当機能のみのインストールとなりますので、その場合は確認画面が表示されます。

```
  インストールコマンド          Ver. X.XX
                                  Copyright (C) NEC Corporation 19XX,19XX -
システムファイルの転送

領域サイズが２０ＭＢ未満のため、日本語ＭＳ－ＤＯＳ５．０Ａ相当機能のみ
インストールします

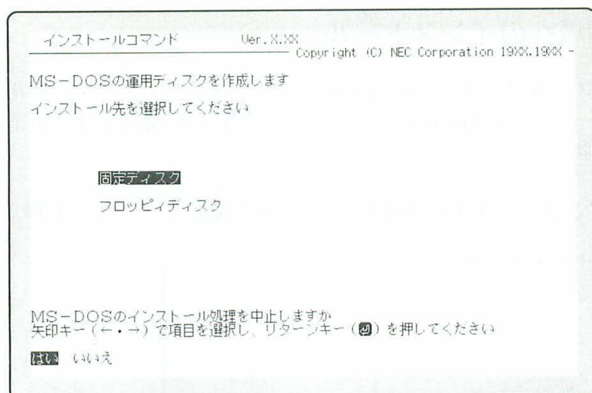
よろしいですか
矢印キー（←・→）で項目を選択し、リターンキー（↵）を押してください
（ESCキーを押すと前の画面に戻ります）
はい  いいえ
```

このまま処理を続ける場合は［はい］を選択して[↵]キーを押し、インストールする領域を変更する場合は［いいえ］を選択して[↵]キーを押して領域の確保を行ってください。

処理を中止する場合は、[ESC]キーを押すと領域選択画面に戻ります。



DoubleSpaceの圧縮ドライブに、MS-DOS 6.2のシステムを再インストールすることはできません。



処理を中止する場合は［はい］を選択して⏎キーを押し、そのまま実行する場合は［いいえ］を選択して⏎キーを押してください。

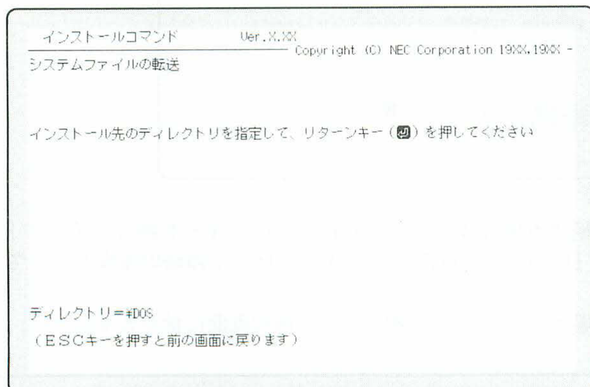


領域の大きさが31Mバイト以下の場合は、その領域に対してDoubleSpaceによる圧縮はできません。

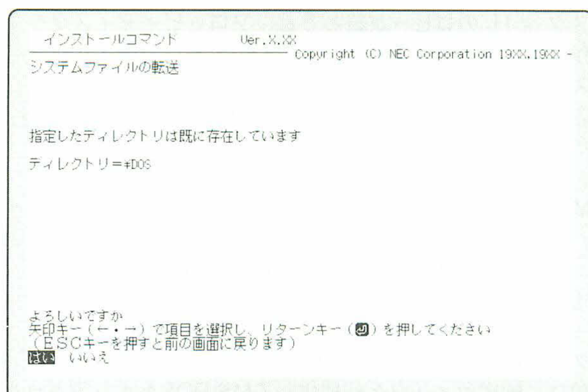
● システムファイルの転送

① システムファイルをインストールする固定ディスクの、どのディレクトリにファイルをコピーするのかを指定します。はじめは“¥DOS”が表示されますので、このままでよければ⏎キーを押してください。別の名前のディレクトリにしたいときは、BSキーでディレクトリ名を消して、新しいディレクトリ名を入力して⏎キーを押してください。

固定ディスクを初期化してインストールしている場合は、④からの手順を実行してください。旧バージョンのMS-DOSをアップグレードしている場合は、このまま②に進んでください。

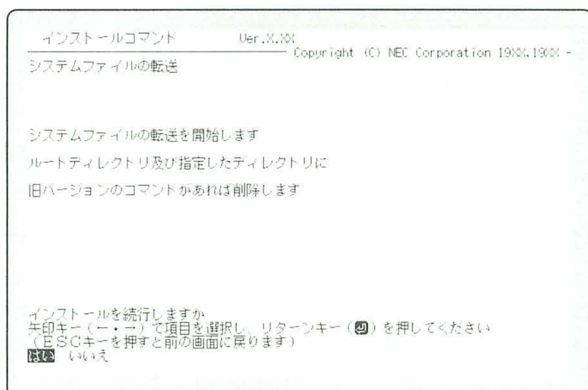


② 旧バージョンのMS-DOSをアップグレードしている場合で、すでに存在するディレクトリ名と同じディレクトリ名でMS-DOS 6.2のコマンドをインストールしようとすると、次の画面が表示されます。



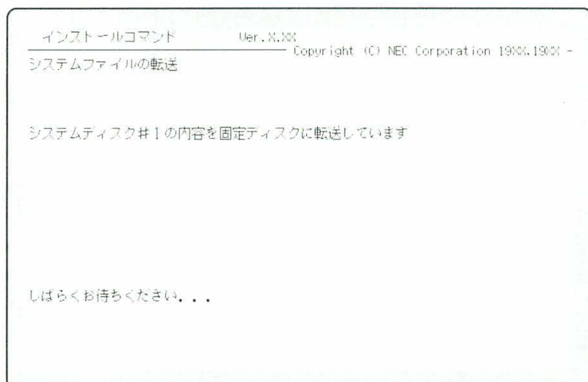
このままインストールして問題がなければ↵キーを押してください。違う名前でインストールしたい場合は、別のディレクトリ名を入力してください。

③　ディレクトリの旧バージョンのコマンド削除画面が表示されます。



旧バージョンのコマンドを削除する場合は［はい］を選択して↵キーを押し、削除しない場合は［いいえ］を選択して↵キーを押してください。

④　システムの転送が始まります。



⑤　『システムディスク #1』のコピーが終わると、フロッピィディスクを交換するようメッセージが表示されます。
フロッピィディスクドライブから『システムディスク #1』を抜き取り、『システムディスク #2』を差し込んで↵キーを押してください。3枚目以降のシステムディスクも同様に、画面の指示にしたがってコピーしてください。

⑥　旧バージョンのMS-DOSをアップグレードしている場合は、辞書ファイルの更新確認画面が表示されます。
更新する場合は、[はい] を選択して↵キーを押し、更新しない場合は、[いいえ] を選択して↵キーを押してください。

⑦　システムディスクの内容をすべてコピーし終わると、システムファイルの転送は終了です。ここから先の手順は、固定ディスクを初期化してMS-DOSをインストールした場合と、旧バージョンのMS-DOSをアップグレードした場合で異なります。

(1) 旧バージョンのMS-DOSをアップグレードした場合の手順

お使いのコンピュータシステムにあったCONFIG.SYSを自動的に作成します。変更したい場合は、インストール終了後にCUSTOMコマンドで変更してください。

```
  インストールコマンド          Ver.X.XX
                                   Copyright (C) NEC Corporation 19XX.19XX -
環境設定

マシン構成に合わせて、最適なDOS環境を自動設定します
変更が必要な場合はインストール完了後、CUSTOMコマンドを実行してください

マシン構成    CPUタイプ      :  386-486
              メモリサイズ    :  640KB + 5 MB

システム情報  プリンタ        :  使用しない  CD-ROM   :  使用する
              RS-232C        :  使用しない
              日本語(NECAI)   :  使用する
              EMSメモリ       :  使用する
              XMSメモリ       :  使用する
              HDキャッシュ    :  使用する

環境ファイル(CONFIG.SYS)は既に存在しています
(CONFIG.SYSをCONFIG.OLDとしてルートディレクトリに保存します)
コピーしますか
矢印キー(←・→)で項目を選択し、リターンキー(↵)を押してください

はい  いいえ
```

マシン構成の欄に表示される情報は、お使いのコンピュータによって異なります。
AUTOEXEC.BATファイルの更新確認画面が表示されます。

```
  インストールコマンド          Ver.X.XX
                                   Copyright (C) NEC Corporation 19XX.19XX -
環境設定



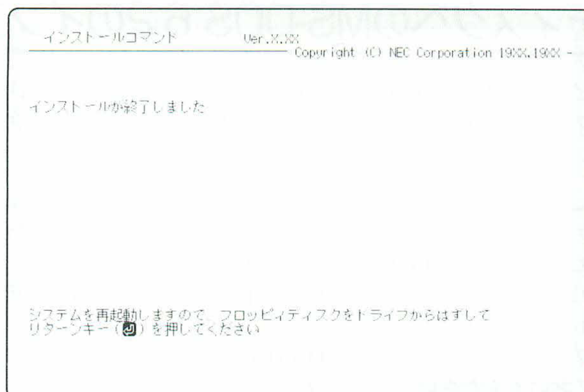





自動起動ファイル(AUTOEXEC.BAT)は既に存在しています
(AUTOEXEC.BATをAUTOEXEC.OLDとしてルートディレクトリに保存します)
コピーしますか
矢印キー(←・→)で項目を選択し、リターンキー(↵)を押してください

はい  いいえ
```

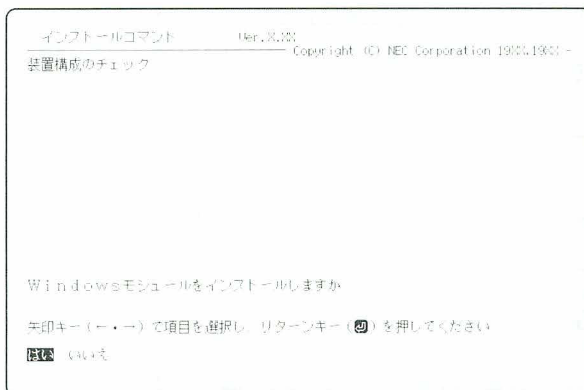
更新する場合は、[はい] を選択して↵キーを押し、更新しない場合は、[いいえ] を選択して↵キーを押してください。MS-DOS 6.2のインストールは終了です。引き続き⑧に進んでください。



(2) 固定ディスクを初期化してインストールした場合

お使いのコンピュータシステムにあったCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATを自動的に作成します。変更したい場合は、インストール終了後にCUSTOMコマンドで変更してください。引き続き⑧に進んでください。

⑧ お使いのコンピュータシステムにWindows 3.1以上が存在した場合、Windowsモジュール組み込み確認のメッセージが表示されます。Windowsモジュール組み込みについてのより詳しい情報は、「1.3 Windows 3.1用コマンドのインストール」を参照してください。
Windows 3.1が組み込まれていない場合は、画面のメッセージにしたがってインストールを終了してください。



組み込む場合は、［はい］を選択して↵キーを押し、再起動後のメッセージにしたがってWindows用コマンドをインストールしてください。組み込まない場合は［いいえ］を選択して↵キーを押してください。

以上でMS-DOS 6.2の固定ディスクに対するインストールは終了です。



Windowsモジュールの組み込みは、MS-DOS 6.2のインストールと同時に行うことができますが、別にINSTWINコマンドを使って行うこともできます。INSTWINコマンドについては「1.3 Windows 3.1用コマンドのインストール」を参照してください。

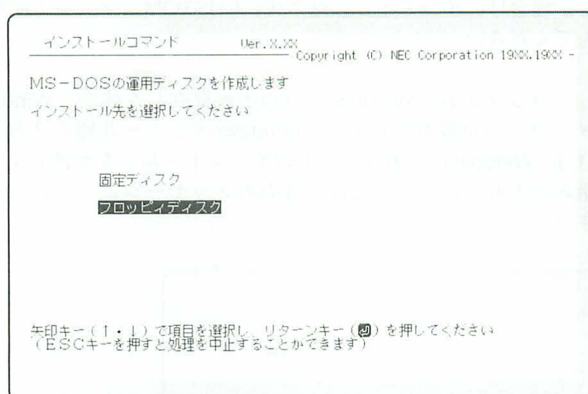
1.2 フロッピィディスクへのMS-DOS 6.2のインストール

ここでは、フロッピィディスクにMS-DOS 6.2をインストールする手順を説明します。なお、運用ディスクとなるフロッピィディスクは“初期化”されますので、ディスク内のデータは失われます。十分注意してください。

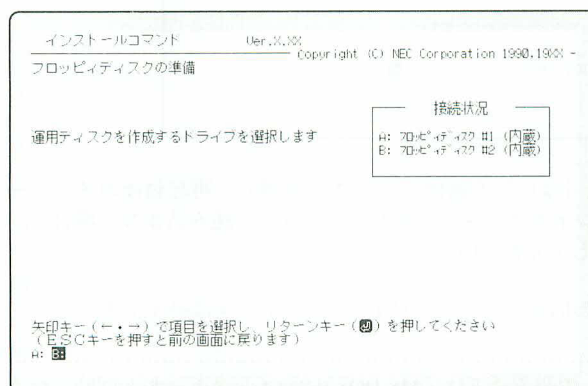


- フロッピィディスクにインストールするには、フロッピィディスクドライブが2台以上、またはフロッピィディスクドライブとRAMドライブが合わせて2台以上必要です。
- フロッピィディスクにインストールした場合は、MS-DOS 5.0A相当の機能での使用となります。
- MS-DOS 6.2をフロッピィディスクへインストールするには、フロッピィディスクが5枚必要です。あらかじめフロッピィディスクには『MS-DOS 6.2 運用ディスク』と書き、#1～#5までの番号をつけておいてください。

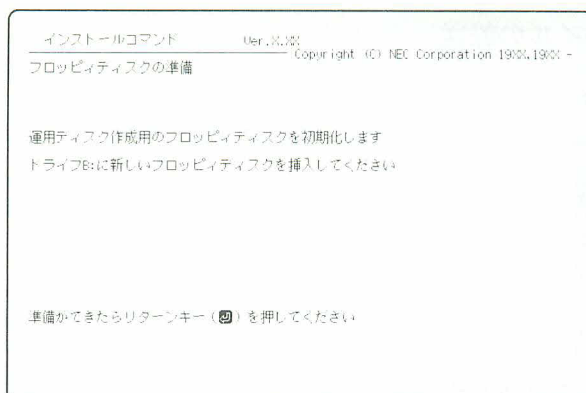
① フロッピィディスクへのインストールを行います。まず、『システムディスク #1』をドライブに挿入し、フロッピィディスクから起動してください。



② フロッピィディスクを[↑][↓]キーで選択して[↵]キーを押してください。

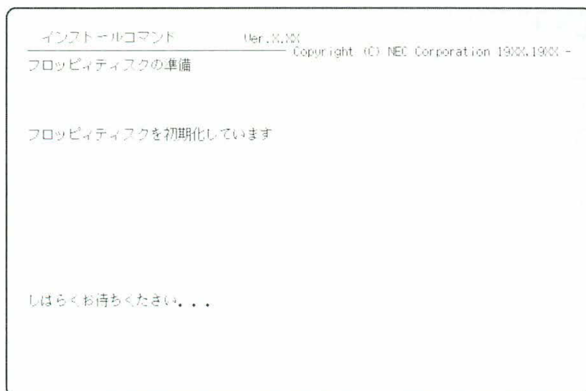


③ インストール先のフロッピディスクを入れるドライブ名を[→][←]キーで選択して[↵]キーを押してください。

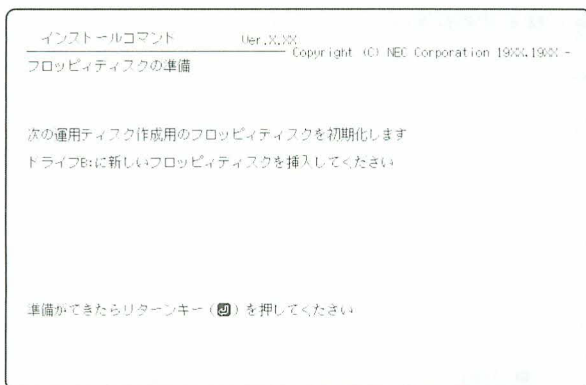


④　ドライブ確認画面が表示されます。手順③で示したドライブに『運用ディスク #1』となるフロッピィディスクを入れ、⏎キーを押してください。

⑤　フロッピィディスクの初期化画面が表示されます。

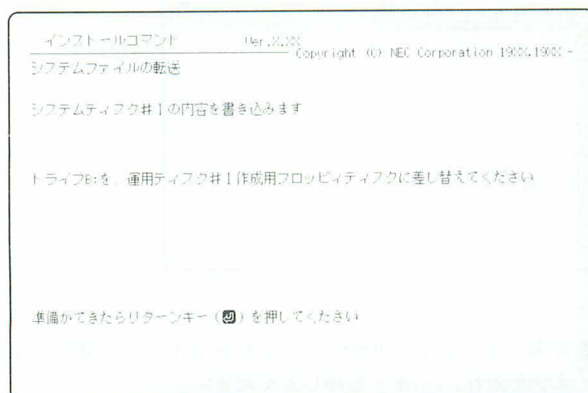


⑥　１枚目のフロッピィディスクの初期化が終わると、次の運用ディスクを挿入するように指示されます。枚数分の運用ディスクの初期化を行ってください。



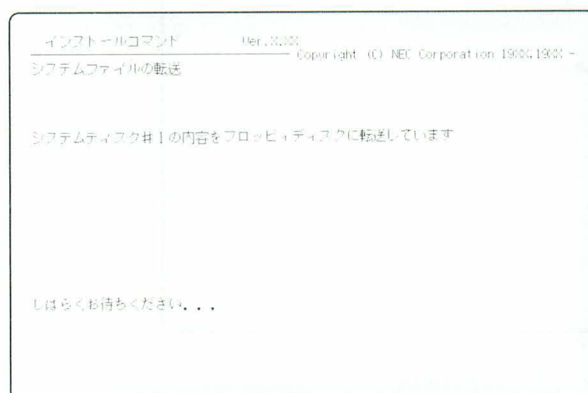
● システムファイルの転送

① すべての運用ディスクの初期化が終わると、次の画面が表示されます。

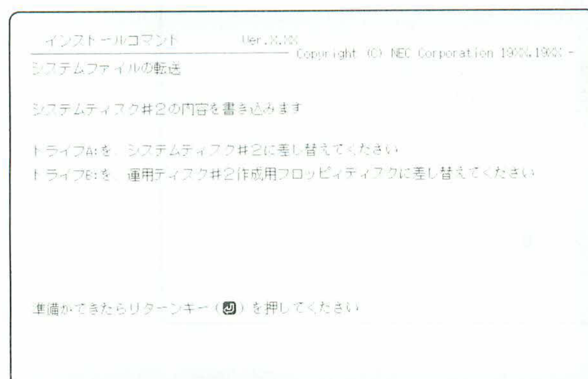


指定されたドライブに『運用ディスク #1』を挿入し、↵キーを押してください。

② システムを転送します。



③ 『システムディスク』や『運用ディスク』を交換する指示が表示されます。指示にしたがってディスクを差し替えてください。



④ システムディスクの内容をすべてコピーし終わると、システムファイルの転送は終りです。続いてインストールコマンドは『運用ディスク #1』でお使いのコンピュータのシステムにあったCONFIG.SYSファイルを自動作成します。指定されたドライブに『運用ディスク #1』を挿入してください。なお、マシン構成の欄に表示される情報は、お使いのコンピュータによって異なります。

```
  インストールコマンド          Ver.X.XX
─────────────────────────── Copyright (C) NEC Corporation 19XX,19XX -
環境設定

マシン構成に合わせて、最適なDOS環境を自動設定します
変更が必要な場合はインストール完了後、CUSTOMコマンドを実行してください

マシン構成    CPUタイプ      :  386/486
              メモリサイズ    :  640KB + 9 MB

システム情報  プリンタ        :  使用しない  CD-ROM   :  未接続
              RS-232C         :  使用しない
              日本語(NECAI)   :  使用する
              EMSメモリ       :  使用する
              XMSメモリ       :  使用する
              HDキャッシュ    :  使用しない

環境ファイル(CONFIG.SYS)を作成します

リターンキー(⏎)を押してください
```

⑤ フロッピィディスクへのMS-DOS 6.2のインストールは終了です。

```
  インストールコマンド          Ver.X.XX
─────────────────────────── Copyright (C) NEC Corporation 19XX,19XX -


インストールが終了しました






システムを再起動しますので
運用ディスク#1を立ち上げドライブへ差し替えて
リターンキー(⏎)を押してください
```

『運用ディスク #1』を1台目のフロッピィディスクに挿入し、⏎キーを押してください。自動的にコンピュータが再起動してMS-DOS 6.2が起動します。



フロッピィディスクではMS-DOS 6.2のサポートするすべての機能を使用できません。
また、フロッピィディスクでの運用には、2台以上のフロッピィディスクドライブが必要です。MS-DOS 6.2の新しい機能をお使いになるためには、固定ディスクでの使用をお奨めします。

1.3 Windows 3.1用コマンドのインストール

ここでは、MS-DOS 6.2に添付されているWindows用コマンドのインストール方法について説明します。

MS-DOS 6.2には、Windows 3.1をより便利にご使用いただくために、あらたに次の3つのコマンドがサポートされました。

ウイルスバスター98
MWUNDELコマンド
DoubleSpace情報

ここでは、これらのコマンドのインストール方法を解説します。各々のコマンドの機能と操作法については、各コマンドのヘルプを参照してください。

1.3.1 インストールの手順

ここではINSTWINコマンドを使用して、お使いの固定ディスクのWindowsに新たなコマンドをインストールする方法を説明します。「1.1　固定ディスクへのMS-DOS 6.2のインストール」から引続きこの章を参照された場合は、手順の②以降からお読みください。



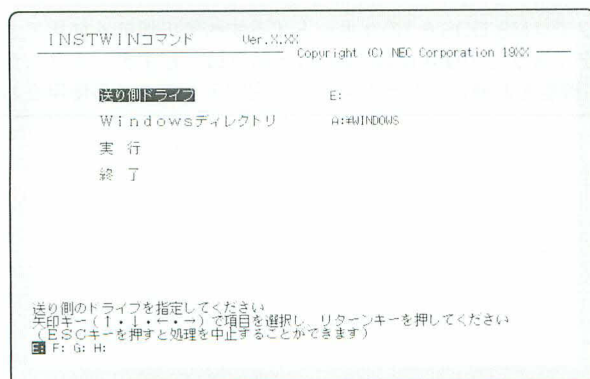
MS-DOS 6.2をインストールした際に、Windowsモジュールのインストールを済ませている方は、これ以降の作業を行う必要はありません。
また、インストールするWindowsモジュールがご使用になれるのは、バージョン3.1以降のWindowsのみです。

Windows 3.1用コマンドをインストールする手順は次の通りです。Windowsを実行している場合は、これを終了しMS-DOSのコマンドプロンプトにしてください。

① MS-DOSのコマンドプロンプトから次のように入力します。

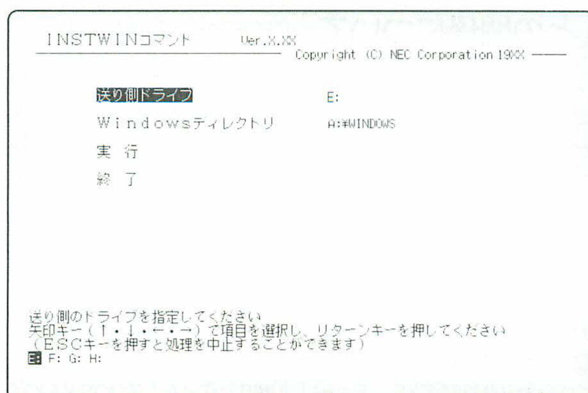
INSTWIN ↵

しばらく、固定ディスク内のWindowsを検索した後、INSTWINコマンドのメニューが表示されます。インストールを中止する場合は、↓キーで［終了］を選び、↵キーを押してください。なお、お使いの環境によって、表示されるドライブ名やディレクトリ名は異なります。

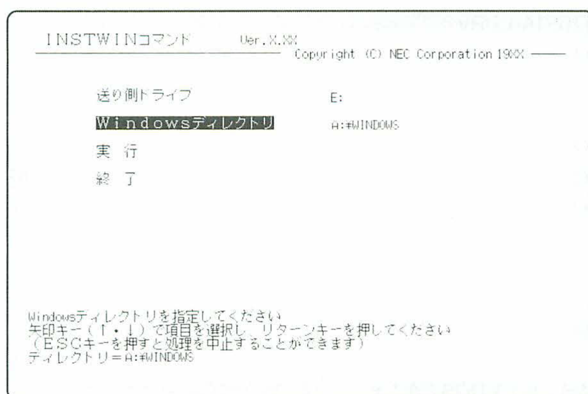


Windowsがインストールされていない場合は、Windowsがインストールされていない旨のメッセージを表示し、INSTWINコマンドは終了します。この場合はWindowsを固定ディスクにインストールしてから、INSTWINコマンドを再度実行してください。

② 最初に送り側ドライブを設定します。画面には送り側ドライブとして使用できるドライブ名が表示されています。[←][→]キーでドライブを指定し、[↵]キーを押して選択してください。



③ 次にインストールするWindowsディレクトリを選択します。画面にインストールの対象のWindowsディレクトリ名が表示されます。



④ すべて設定が終了したら、実行を選択してください。インストールが始まります。メッセージにしたがい、操作してください。次のメッセージが表示されたら、インストールは完了です。

インストールは終了しました
どれかキーを押してください

適当なキーを押すとINSTWINコマンドを終了するかどうか聞いてきます。終了する場合は［はい］を選択してください。

これでWindows 3.1用のコマンドのインストールは終了です。次回のWindows起動時からアップグレードした機能をお使いいただけます。インストールされたWindowsの新機能については、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「発展編　5.6 Windows用ユーティリティを使う」を参照してください。

1.4 MS-DOS 6.2ご使用に際して

一部の機種やソフトウェアのなかには、MS-DOS 6.2をお使いいただく際に設定作業が必要なものがあります。ここでは、その作業について解説します。該当する項目をよく読んでから作業を行ってください。

1.4.1 Windows 3.1との関係について

MS-DOS 6.2のインストール後にWindos 3.1をインストールした場合、CONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATの設定を修正する必要があります。SEDITを使用し、AUTOEXEC.BATとCONFIG.SYSの各行を修正してください（矢印のステートメントを参考にしてください）。

[CONFIG.SYS]

```
FILES=30
BUFFERS=10
SHELL=¥COMMAND.COM /P
DEVICE=A:¥WINDOWS¥HIMEM.SYS
DEVICE=A:¥WINDOWS¥EMM386.EXE /P=64 /UMB /T=A:¥DOS¥EXTDSWAP.SYS
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥SETVER.EXE
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥PRINT.SYS /U
DEVICE=A:¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE /DOUBLE_BUFFER
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥RSDRV.SYS
DEVICEHIGH=A:¥DOS¥KKCFUNC.SYS
DEVICE=A:¥DOS¥NECAI1.DRV
DEVICE=A:¥DOS¥NECAI2.DRV
DOS=HIGH,UMB

→DEVICE=A:¥DOS¥HIMEM.SYS
→DEVICE=A:¥DOS¥EMM386.EXE /P=64 /UMB /T=A:¥DOS¥EXTDSWAP.SYS
→REM DEVICE=A:¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE /DOUBLE_BUFFER
```

[AUTOEXEC.BAT]

```
A:¥WINDOWS¥SMARTDRV.EXE
@ECHO OFF
PATH A:¥WINDOWS;A:¥DOS;A:¥
SET TEMP=A:¥DOS
SET DOSDIR=A:¥DOS
MOUSE
DOSSHELL
MOUSE /R

→A:¥DOS¥SMARTDRV.EXE /X
```

1.4.2 98MULTi CanBeをご使用の場合

98MULTi CanBe（PC-9821Cb／Cx／Cf）でMS-DOS 6.2をご使用になる場合は、テキストモードでご使用ください。

1.4.3 PC-9801NL/Rをご使用の場合

PC-9801NL/RでMS-DOS 6.2にアップグレードされる場合は、アップグレード後に、CONFIG.SYSとバッチファイルの設定を変更する必要があります。SEDITで次の例を参考に変更してください（矢印のステートメントに関して変更してください）。なお、変更作業に際してはまず次の手順でSEDITを起動してください。

① 『MS-DOS 6.2システムディスク＃1』で起動
② インストールコマンドをESCキーにより終了
③ 『MS-DOS 6.2システムディスク＃8』をセットしSEDITを起動
④ MS-DOS 6.2にアップグレードしたドライブ（固定ディスクの中）の次の各ファイルを変更

［CONFIG.SYS］

```
FILES＝30
BUFFERS＝20
SHELL＝￥COMMAND.COM  /P
DEVICE＝A：￥DOS￥HIMEM.SYS
DEVICE＝A：￥DOS￥EMM386.EXE  /P＝12  /UMB  /T＝A：￥DOS￥EXTDSWAP.SYS
DEVICE＝A：￥DOS￥SETVER.EXE
DEVICEHIGH＝A：￥DOS￥PRINT.SYS  /U
DEVICEHIGH＝A：￥DOS￥RSDRV.SYS
DEVICEHIGH＝A：￥DOS￥KKCFUNC.SYS
DEVICEHIGH＝A：￥DOS￥SSDRV.SYS
DEVICEHIGH＝A：￥DOS￥CARDSET.SYS
DEVICEHIGH＝A：￥DOS￥MCDRV.SYS
DOS＝HIGH,UMB

→DEVICE＝A：￥DOS￥EMM386.EXE  /P＝256  /UMB  /T＝A：￥DOS￥EXTDSWAP.SYS  /DPMI
```

［￥DEF￥JW_SHELL.BAT］

```
@ECHO  OFF
：LOOP
A：￥DOS￥ADDDRV  A：￥DEF￥ATOK8M.DEV
A：￥DOS￥DPMI  /C  A：￥DEF￥JW2.BAT
A：￥DOS￥DELDRV
DPMI  /C  A：￥DEF￥SHELL.BAT
IF  NOT  EXIST  A：￥DOS￥＄E＄X＄I＄T  GOTO  LOOP
DEL  A：￥DOS￥＄E＄X＄I＄T  ＞  NUL

→
DPMI
A：￥DOS￥ADDDRV  A：￥DEF￥ATOK8M.DEV
CALL  A：￥DEF￥JW2.BAT
A：￥DOS￥DELDRV
DPMI  /R
DPMI
CALL  A：￥DEF￥SHELL.BAT
DPMI  /R
```

［￥DEF￥SHELL_JW.BAT］

```
@ECHO  OFF
：LOOP
DPMI  /C  A：￥DEF￥SHELL.BAT
IF  EXIST  A：￥DOS￥＄E＄X＄I＄T  GOTO  END
A：￥DOS￥ADDDRV  A：￥DEF￥ATOK8M.DEV
A：￥DOS￥DPMI  /C  A：￥DEF￥JW2.BAT
A：￥DOS￥DELDRV
GOTO  LOOP
：END
DEL  A：￥DOS￥＄E＄X＄I＄T  ＞  NUL

DPMI
CALL  A：￥DEF￥SHELL.BAT
DPMI  /R

DPMI
A：￥DOS￥ADDDRV  A：￥DEF￥ATOK8M.DEV
CALL  A：￥DEF￥JW2.BAT
A：￥DOS￥DELDRV
DPMI  /R
```

1.4.4 PC-9801NL/A260Aをご使用の場合

PC-9801NL/A260AでMS-DOS 6.2にアップグレードされる場合は、アップグレード後に、CONFIG.SYSとバッチファイルの設定を変更する必要があります。SEDITで以下の例を参考に変更してください（矢印のステートメントを変更してください）。なお、変更作業に際してはまず次の手順でSEDITを起動してください。

① 『MS-DOS 6.2システムディスク＃1』で起動
② インストールコマンドを[ESC]キーにより終了
③ 『MS-DOS 6.2システムディスク＃8』をセットしSEDITを起動
④ 固定ディスクのMS-DOS 6.2をインストールしたドライブの次の各ファイルを変更

［CONFIG.SYS］

```
FILES=30
BUFFERS=20
SHELL=￥COMMAND.COM　/P
DEVICE=A：￥DOS￥HIMEM.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥EMM386.EXE　/P=12　/UMB　/E=DC00−DFFF　/T=A：￥DOS￥EXTDSWAP.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥SETVER.EXE
DEVICE=A：￥DOS￥PRINT.SYS　/U
DEVICE=A：￥DOS￥RSDRV.SS
DEVICE=A：￥DOS￥KKCFUNC.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥SSDRV.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥CS.EXE
DEVICE=A：￥DOS￥CSALLOC.EXE　A：￥DOS￥CSALLOC.INI
DEVICE=A：￥DOS￥CDCOMP.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥MCDRV.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥HDCARD.SYS
DEVICE=A：￥DOS￥CARDID.EXE　A：￥DOS￥CARDID.INI
DOS=HIGH,UMB

→ DEVICE=A：￥DOSEMM386.EXE　/P=256　/UMB　/E=DC00−DFFF　/T=A：￥DOS￥EXTDSWAP.SYS
/DPMI
```

［￥DEF￥JW_SHELL.BAT］

```
@ECHO　OFF
：LOOP
A：￥DOS￥DPMI　/C　A：￥DEF￥JW2.BAT
A：￥DOS￥DPMI　/C　A：￥DEF￥SHELL.BAT
IF　NOT　EXIST　A：￥DOS￥＄E＄X＄I＄T　GOTO　LOOP
DEL　A：￥DOS￥＄E＄X＄I＄T　＞　NUL

DPMI
CALL　A：￥DEF￥JW2.BAT
DPMI　/R

DPMI
CALL　A：￥DEF￥SHELL.BAT
DPMI　/R
```

[￥DEF￥SHELL_JW.BAT]

```
@ECHO  OFF
:LOOP
DPMI  /C  A:￥DEF￥SHELL.BAT
IF  EXIST  A:￥DOS￥$E$X$I$T  GOTO  END
A:￥DOS￥DPMI  /C  A:￥DEF￥JW2.BAT
GOTO  LOOP
:END
DEL  A:￥DOS￥$E$X$I$T  >  NUL

DPMI
CALL  A:￥DEF￥SHELL.BAT
DPMI  /R

DPMI
CALL  A:￥DEF￥JW2.BAT
DPMI  /R
```

1.4.5 SV-H98 model61ご使用の場合

SV-H98 model61のディスクアレイへMS-DOS 6.2をインストールする場合、既存領域へのインストールはインストールコマンドの手順に従ってインストールできますが、新規領域へのインストールは以下の手順でインストールしてください（なお、アップグレードセットご購入の場合は、新規領域へのインストールはできません）。

① 『MS-DOS 6.2システムディスク＃1』でMS-DOS 6.2を起動後（インストールコマンドが起動される）、ESCキーを押した後、「はい」を選んでインストールコマンドを終了してください。

② 装置に添付のユーティリティディスクと入れ替えて、FORMATAコマンドを/Iオプションを付けて起動してください。

例：40Mバイトの領域を確保する場合

A>FORMATA 40 /I

③ 次のメッセージが表示されたら、Yキーを押す前に、フロッピィディスクを『MS-DOS 6.2システムディスク ＃1』に入れ替えてください。

装置番号1のディスクアレイに領域を確保します。よろしいですか<Y/N>？

④ 次のメッセージが表示され、FORMATAコマンドが終了します。

フォーマットが終了しました。システムを再起動してください。

⑤ 『MS-DOS 6.2システムディスク ＃1』を入れたままシステムを再起動してください。インストールコマンドが起動されたら、メッセージにしたがってインストールを行ってください。

1.4.6 BCKWHEAT.SYSについて

次の機種にMS-DOS 6.2をインストールした場合、CONFIG.SYSにBCKWHEAT.SYSが自動的に組み込まれます。このドライバは、当該機種においてMS-DOS 6.2を動作させるために必要なドライバですので、削除しないようにお願いします。

- PC-9821Ts
- PC-9821Ap2/As2
- PC-9821Bp/Bs/Be
- PC-9801BA2/BS2/BX2

1.4.7 PC-9801N-J03について

PC-9801-J03（SCSIカード）にCD-ROM装置を接続してご使用になる場合は、CUSTOMコマンドで「CD-ROM装置を使用する」と指定しても、CD-ROM装置が認識されない場合があります。このような場合は、SEDITを使用してCONFIG.SYSの中のNECCD.SYSステートメントを一番最後に指定してください。

アプリケーションのインストール

第　2　章

MS-DOS 6.2 INSTALL GUIDE

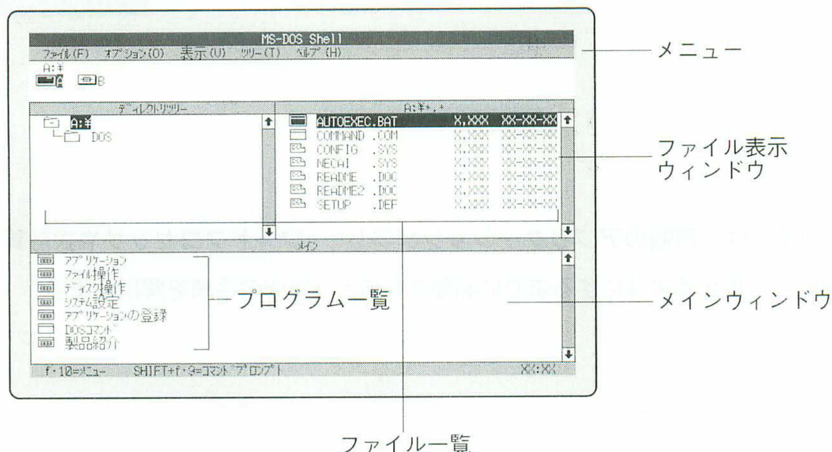
TWO

この章では、市販のアプリケーションソフト―ワードプロセッサや表計算など―をMS-DOSで使えるようにするまでに必要なものと、操作の手順を解説します。

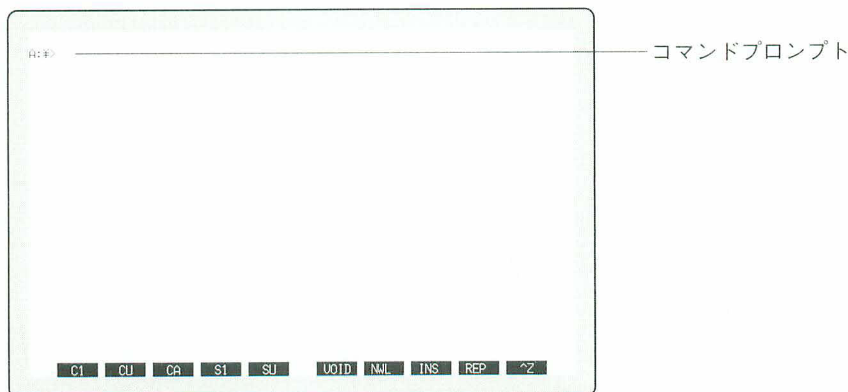
2.1 アプリケーションを使うには

市販のアプリケーションは、買ってきたときの状態のまま使えるわけではありません。まず、アプリケーションを固定ディスクかフロッピィディスクにコピーし、各種の設定をして、いつでも使える状態にする必要があります。このディスクへコピーする作業を「インストール」といいます。

次にインストールしたアプリケーションを「DOSシェル」に登録します。こうしておくと、DOSシェルの「プログラム一覧」から選択するだけで、いつでも簡単にアプリケーションを実行できます。このように、アプリケーションをいつでも使えるように用意してあるディスクのことを「運用ディスク」といいます。



これがDOSシェルの画面です。



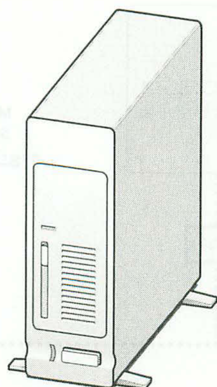
これがコマンドプロンプトの画面です。

ここでは、アプリケーションの運用ディスクをつくる方法をおおまかに説明します。実際にどのようにアプリケーションを使っていくかを考えながら、読み進めてください。

2.1.1 MS-DOSでアプリケーションを使う形態

アプリケーションをMS-DOS上で日常的に使う（運用する、などと表現します）ことを考えると、起動する形態には2つあることがわかります。

● 固定ディスクによる運用



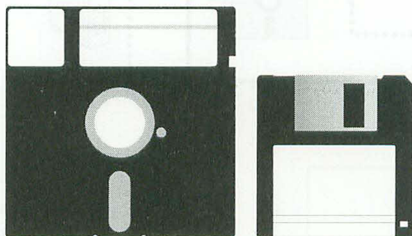
【固定ディスクの例】

固定ディスクに複数のアプリケーションをインストールし、いつでもMS-DOSから使える状態にしておく方法です。MS-DOS自体も固定ディスクから起動するので、フロッピィディスクは基本的に必要ありません。



一部のアプリケーションでは、違法なコピーを防ぐために固定ディスクにインストールできない場合があります。このような場合は、フロッピィディスクで運用ディスクを作成してください。

● フロッピィディスクによる運用



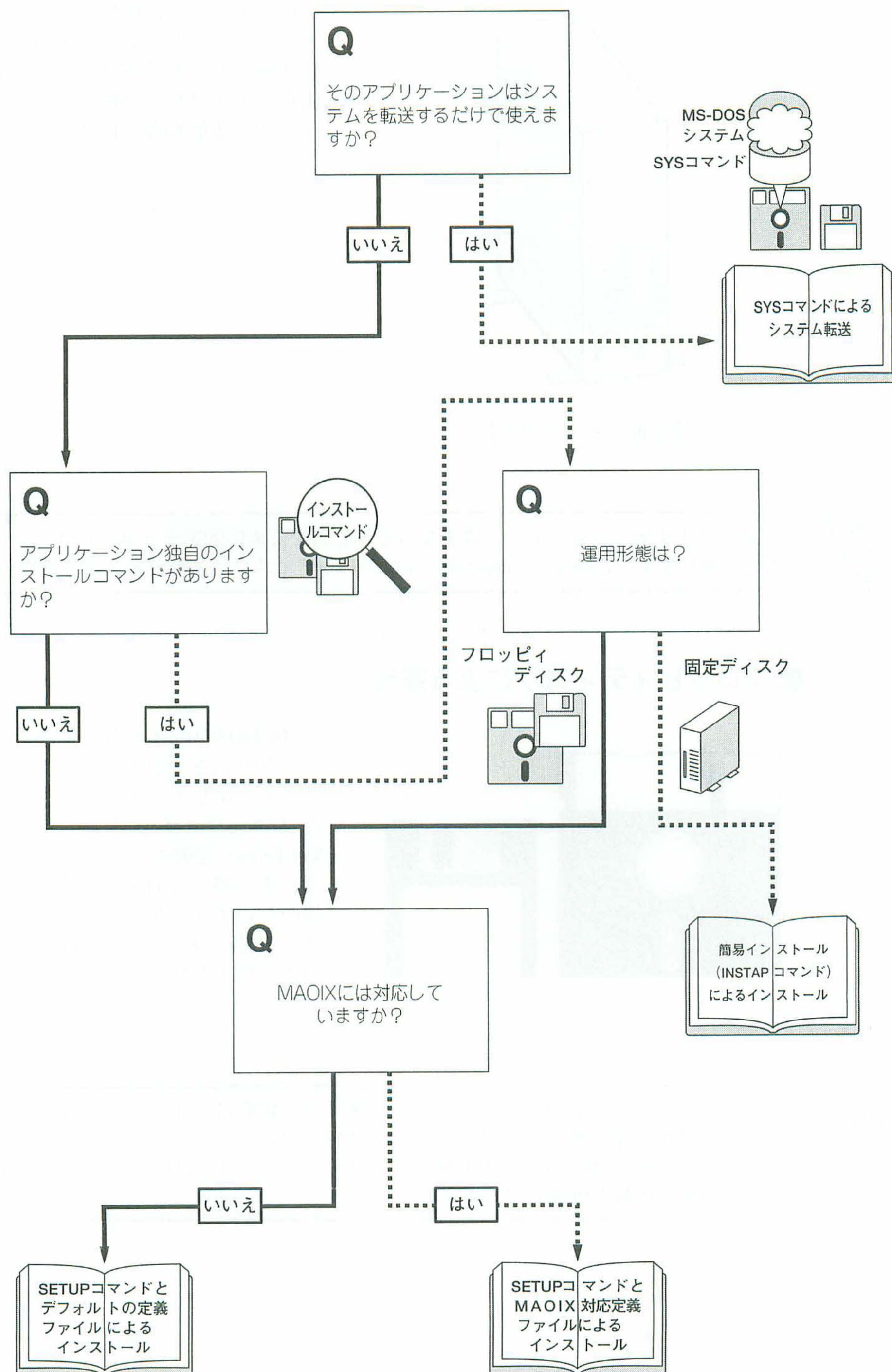
MS-DOSのシステムとアプリケーションのプログラムを1枚のフロッピィディスクにインストールして、アプリケーション起動専用のフロッピィディスクをつくる方法です。MS-DOSの起動からアプリケーションの実行までを一貫して行うことができます。また、使いたいアプリケーションの数だけ運用ディスクを先につくっておけば、あとはディスクの差し替えだけでアプリケーションを使えます。



アプリケーションをフロッピィディスクで運用する場合は、インストールするためのフロッピィディスクが必要です。アプリケーション添付のマニュアルで、フロッピィディスクの種類（「2HD」と呼ばれる1Mバイト、1.44Mバイトタイプ、または「2DD」と呼ばれる640Kバイトタイプ）と必要な枚数を確認してください。

2.1.2 一般的なインストール手順

運用方法を決めたら、次はインストールの方法を選びます。MS-DOSでアプリケーションを使えるようにするまでの手順には大差がありません。まず、アプリケーションに添付されているマニュアルで、次の点を確認してください。インストールの方法は4通りあり、質問に答えていくと、そのアプリケーションに最適なインストール方法がわかります。



次に、それぞれの方法について説明します。



独自のインストール方法を採用しているアプリケーションは、ここで説明する手順ではインストールできないこともあります。インストールの作業を始める前に、アプリケーション添付のマニュアルをよくお読みください。

・SYSコマンドによるシステムの転送

アプリケーションのオリジナルディスクの中には、MS-DOSのシステムのために特別に場所を空けてあるものがあります。このような構造のディスクを「ブランクディスク」といいます。ブランクディスクは、MS-DOSのシステムを追加するだけで運用ディスクとして使えるようになります。

詳しい手順については、本章の「2.2　SYSコマンドによるシステムの転送」を参照してください。

・簡易インストール（INSTAPコマンド）によるインストール

この方法では、INSTAPコマンドを実行し、さらにその中でアプリケーション独自のインストールコマンドを実行します。また、固定ディスクへのインストールに加えて、DOSシェルへの登録や環境ファイルの作成まで行えます。

詳しい手順については、本章の「2.3　簡易インストール（INSTAPコマンド）によるインストール」を参照してください。

・SETUPコマンドとMAOIX対応定義ファイルによるインストール

この方法は「MAOIX方式」と呼ばれるもので、アプリケーション添付のMAOIX対応定義ファイルを使ってSETUPコマンドを実行します。具体的には、SETUPコマンドを起動したときに[iスクリプト一覧]を選択して、以降の作業は画面とアプリケーション添付のマニュアルにしたがって行います。また、固定ディスクやフロッピィディスクへのインストールに加えて、DOSシェルへの登録も行えます。

詳しい手順については、本章の「2.4　SETUPコマンドによるインストール」を参照してください。

・SETUPコマンドとデフォルトの定義ファイルによるインストール

この方法では、“SETUP.INI”という標準の定義ファイルを使ってSETUPコマンドを実行します。また、固定ディスクやフロッピィディスクへのインストールに加えて、DOSシェルへの登録も行えます。

詳しい手順については、本章の「2.4　SETUPコマンドによるインストール」を参照してください。

2.1.3 環境の確認

インストールの全体像をつかんだところで、作業環境を確認しておきます。お使いの環境やこれから行う作業によっては、インストールする前に準備が必要な場合もあります。本編では、次のような状況を前提にインストール手順を説明していますので、あらかじめ確認しておいてください。



「ドライブ」については、『MS-DOS 6.2　ユーザーズマニュアル』の「基本操作編　2.2.1 ドライブとは」を参照してください。

・固定ディスクにインストールする場合

固定ディスクとフロッピィディスクドライブを1台ずつ使います。MS-DOSは固定ディスクから起動するので、固定ディスクが「ドライブA」、フロッピィディスクドライブが「ドライブB」となります（ちなみに2台目のフロッピィディスクドライブがあれば「ドライブC」になります）。

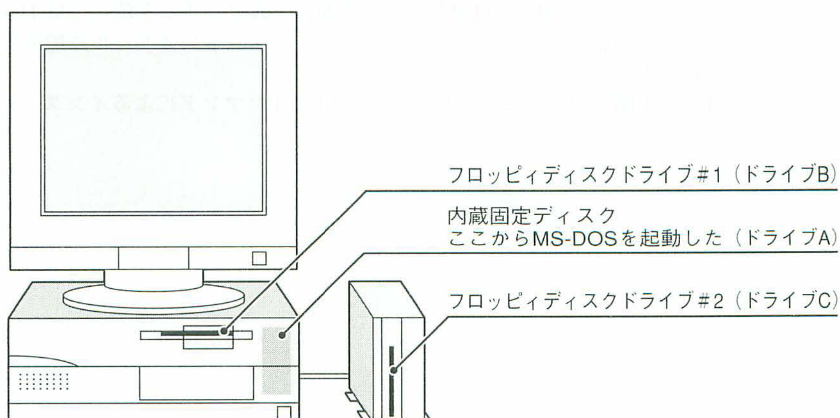
・フロッピィディスクにインストールする場合

固定ディスク1台に加えて、フロッピィディスクドライブが2台必要です。もし、お使いのコンピュータにフロッピィディスクドライブが1台しかない場合は、もう1台増設してください。この場合もMS-DOSは固定ディスクから起動するので、固定ディスクが「ドライブA」、1台目のフロッピィディスクドライブが「ドライブB」、2台目は「ドライブC」となります。



仮想フロッピィディスクドライブを使ってアプリケーションをフロッピィディスクにインストールする場合は、まずアプリケーションのオリジナルディスクを「DISKCOPYコマンド」を使って、仮想フロッピィディスクドライブにコピーしておいてください。DISKCOPYコマンドについては、『MS-DOS 6.2　ユーザーズマニュアル』の「発展編　5.2 DISKCOPYコマンド」を参照してください。

仮想フロッピィディスクドライブは、本機能がサポートされている機種で、MS-DOS 5.0A-Hインストール済みの領域にMS-DOS 6.2をインストールした場合にのみご利用いただけます。



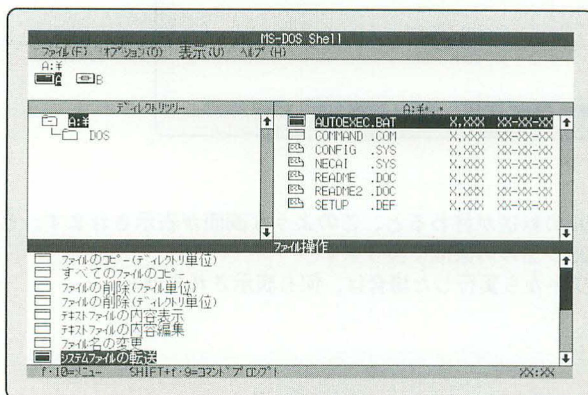
2.2 SYSコマンドによるシステムの転送

ここでは、本章の「2.1.2 一般的なインストール手順」で説明した「ブランクディスク」にMS-DOSのシステムを追加して、アプリケーションの運用ディスクをつくる方法を説明します。
カレントドライブがドライブAであることを確認後にDOSシェルを起動し、アプリケーションのブランクディスクをドライブBにセットして作業をはじめてください。



DOSシェルの起動方法については、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「基本操作編 1.2 DOSシェルの起動と終了」を参照してください。

① ［ファイル操作］から［システムファイルの転送］を選択します。



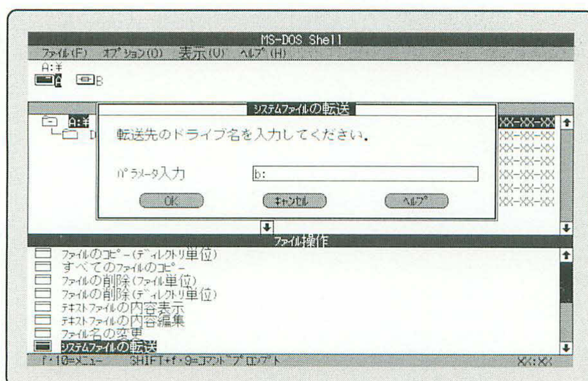

マウスの操作

［メイン］ウィンドウの［ファイル操作］をダブルクリックし、その中の［システムファイルの転送］をダブルクリックしてください。


キーボードの操作

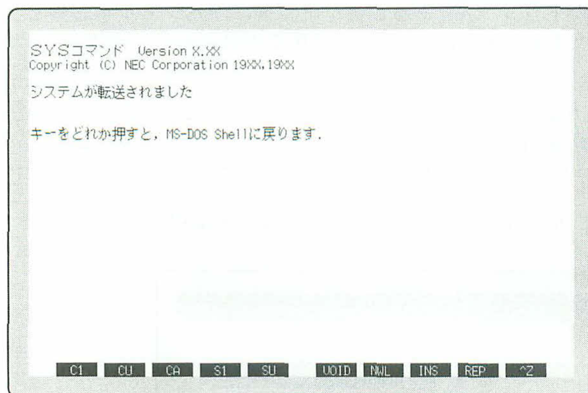
まずTABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させます。次に、↑↓キーを使って［ファイル操作］を反転表示させ、↵キーを押します。さらに↑↓キーを使って［システムファイルの転送］を反転表示させ、↵キーを押してください。
コマンドプロンプトから実行する場合は、“SYS B：”と入力し、↵キーを押してください。

② システム転送先のドライブを指定します。



［パラメータ入力］の欄に“B：”と入力し、⏎キーを押してください。MS-DOSのシステムファイルの転送が始まります。

③ DOSシェルの画面に戻ります。



システムファイルの転送が終わると、このような画面が表示されます。どれかキーを押してください。DOSシェルの画面に戻ります。
コマンドプロンプトから実行した場合は、何も表示されません。

2.3 簡易インストール（INSTAPコマンド）によるインストール

ここでは、INSTAPコマンドでアプリケーションをインストールし、DOSシェルに登録する方法を説明します。また、一度MAOIX方式でインストールしたアプリケーションを、INSTAPコマンドでDOSシェルに登録しなおす方法も説明します。



INSTAPコマンドを使ってDOSシェルに登録するのと、MAOIX方式で登録するのとでは、アプリケーションの起動方法が異なります。以前にMAOIX方式でインストールしたアプリケーションがある場合は、なるべくINSTAPコマンドで登録し直してください。

2.3.1 インストールして登録する

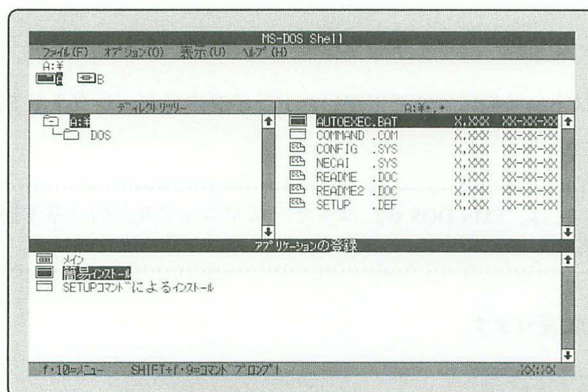
ここでは、アプリケーションを固定ディスクにインストールし、DOSシェルに登録するまでの手順を説明します。

準備ができたらコンピュータの電源を入れて、DOSシェルを起動してから作業を始めましょう。



DOSシェルの起動方法については、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「基本操作編 1.2 DOSシェルの起動と終了」を参照してください。

① INSTAPコマンドを実行します。




マウスの操作

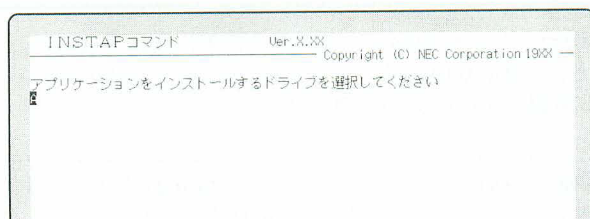
［メイン］ウィンドウにある［アプリケーションの登録］をダブルクリックし、その中の［簡易インストール］をダブルクリックしてください。


キーボードの操作

まず、TABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させます。次に、↑↓キーを使って［アプリケーションの登録］を反転表示させ、↵キーを押します。さらに↑↓キーを使って［簡易インストール］を反転表示させ、↵キーを押してください。

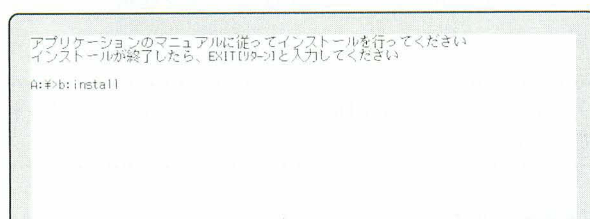
コマンドプロンプトから実行する場合は、“INSTAP ↵” と入力してください。

② インストール先のドライブ名を選択します。



画面には、固定ディスクのドライブ名が表示されています。この中から、アプリケーションをインストールしたいドライブ名を選択します。←→キーで目的のドライブ名（ここでは［A：］）を反転表示させ、⏎キーを押してください。確認のメッセージが表示されたら、［はい］を選択して⏎キーを押してください。

③ アプリケーション独自のインストールコマンドを実行します。

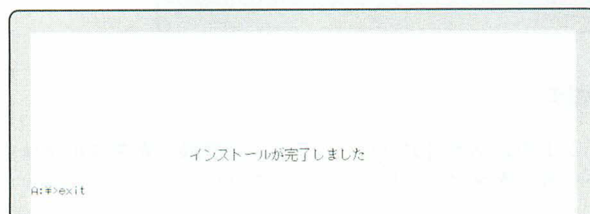


アプリケーション添付のマニュアルにしたがって、独自のインストールコマンドを入力してください。
このとき、インストール先には②で指定したドライブ内のディレクトリを指定してください。



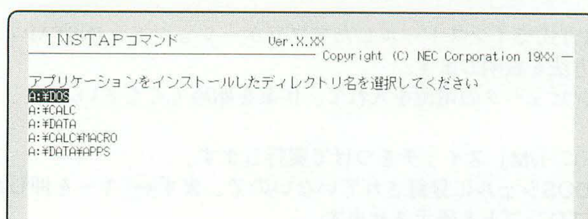
ディレクトリについては、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「基本操作編 2.3 ディレクトリの操作」を参照してください。

④ INSTAPコマンドに戻ります。



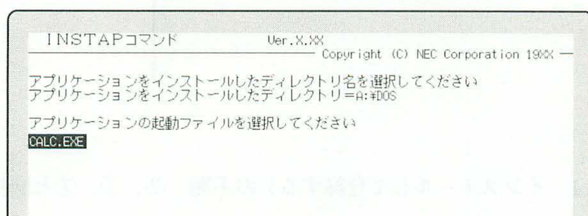
アプリケーションのインストールコマンドが終了すると、このようにコマンドプロンプトが表示されます。"EXIT⏎" と入力して、INSTAPコマンドに戻ってください。

⑤ インストール先のディレクトリを選択します。



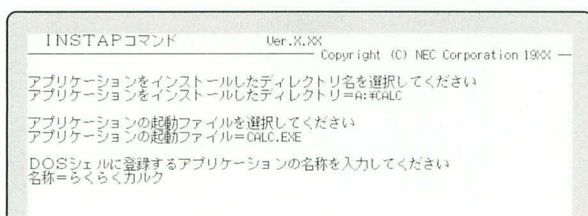
画面には②で指定したドライブ内にあるサブディレクトリの一覧が表示されています。↑↓キーを使って、この一覧からアプリケーションをインストールしたサブディレクトリを反転表示させ、↵キーを押してください。

⑥ アプリケーションの実行ファイルを選択します。



画面には、⑤で指定したサブディレクトリにある実行可能ファイルの一覧が表示されています。↑↓キーを使って、この一覧からアプリケーションの実行ファイルを反転表示させ、↵キーを押してください。
どれが該当するファイルかがわからないときは、アプリケーション添付のマニュアルで確認してください。

⑦ DOSシェルに登録するときの名前を指定します。



ここでは、[メイン] ウィンドウのプログラム一覧に表示する名前を入力します。空白も含めて半角で23文字、全角で11文字以内の名前を入力し、↵キーを押してください。そのアプリケーションが一目で識別できるように、わかりやすい名前をつけましょう。
確認のメッセージが表示されたら、[はい] を選択して↵キーを押してください。

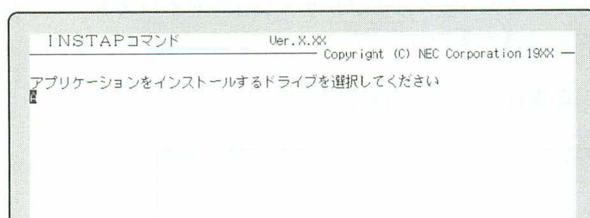
これで、アプリケーションのインストールとDOSシェルへの登録が終了しました。次回DOSシェルを起動したときには、プログラム一覧にアプリケーションが登録され、それを選択するとアプリケーションが起動するはずです。アプリケーションの実行方法については、「第3章 アプリケーションの実行」を参照してください。

2.3.2 以前にインストールしたアプリケーションを登録する

ここでは、MAOIX方式でインストールしたアプリケーションを、INSTAPコマンドでDOSシェルに登録しなおす方法を説明します。

準備ができたらコンピュータの電源を入れて、作業を始めてください。

① INSTAPコマンドに「/M」スイッチをつけて実行します。
このコマンドはDOSシェルに登録されていないので、まずSHIFTキーを押したままf·9キーを押してコマンドプロンプトを表示させます。
コマンドプロンプトが表示されている場合はそのままでかまいません。
この状態で、"INSTAP /M ⏎" と入力してください。



以降は、本章の「2.3.1 インストールして登録する」の手順 ②、⑤、⑦と同様です。

2.4 SETUPコマンドによるインストール

SETUPコマンドを使うインストールには、アプリケーション独自の定義ファイルを使う「MAOIX方式」と、標準の定義ファイル“SETUP.INI”を使う場合があります。どちらの方法がこれからインストールするアプリケーションに適しているかは、本章の「2.1.2 一般的なインストール手順」で確認してください。途中から手順が分かれているので、よく読みながら作業を進めてください。

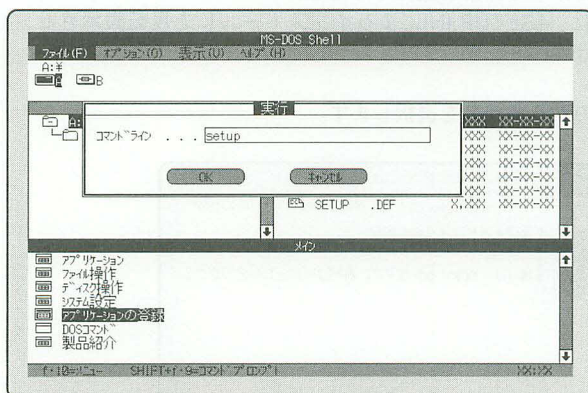
手順は、固定ディスクにインストールする場合と、フロッピィディスクにインストールする場合に分けて説明します。

2.4.1 固定ディスクにインストールする場合

ここでは、SETUPコマンドを使ってアプリケーションを固定ディスクにインストールする方法を説明します。MAOIX方式でもそうでなくても、最初は同じように作業が始まります。途中から作業が分かれるので、よく注意して進めてください。

それでは、コンピュータの電源を入れて、ドライブBにアプリケーションのオリジナルディスクをセットしてから作業を始めましょう。

① コマンドラインからSETUPコマンドを実行します。



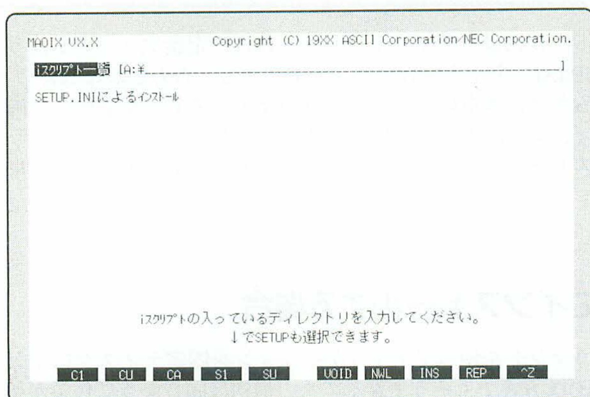
 **マウスの操作**

まず［ファイル］メニューをクリックし、その中の［実行］をクリックしてください。［実行］のダイアログボックスが表示されます。

 **キーボードの操作**

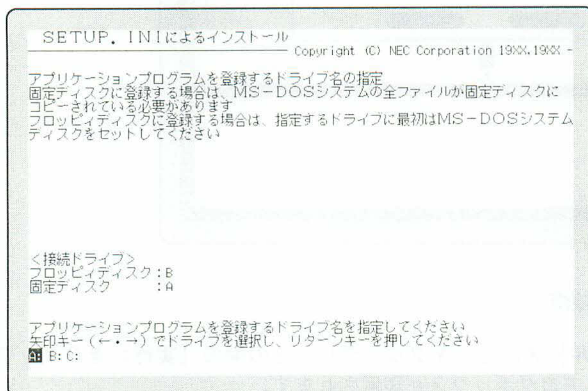
[f·10]キーを押してから[↵]キーを押すと、［ファイル］メニューがオープンします。この状態で[↑][↓]キーを使って［実行］を反転表示させ、[↵]キーを押してください。［実行］のダイアログボックスが表示されます。
コマンドプロンプトが表示されている場合は、そのままでかまいません。
この状態で、“SETUP [↵]”と入力してください。

② インストールの実行方式を選択します。



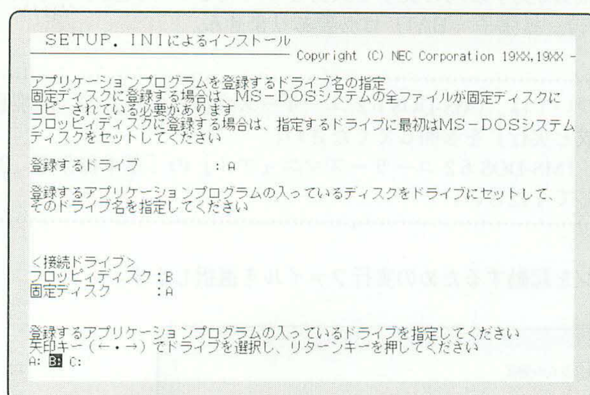
画面には、[iスクリプト一覧] と [SETUP.INIによるインストール] の2つが表示されています。
MAOIX方式で実行する場合は、↑↓キーで [iスクリプト一覧] を反転表示させ、[A：¥] の部分をBSキーで消してから [B：¥] と入力し、⏎キーを押してください。それ以降は、画面の説明にしたがって作業を進めてください。
それ以外の場合は、[SETUP.INIによるインストール] を反転表示させ、⏎キーを押してください。作業は次の③に続きます。

③ インストール先のドライブ名を選択します。



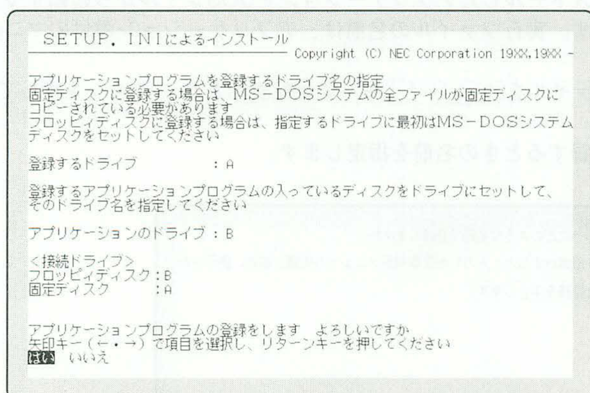
画面の一番下には、ドライブの一覧が表示されています。←→キーで目的のドライブ名（ここでは [A：]）を反転表示させ、⏎キーを押してください。

④　アプリケーションのオリジナルディスクを入れるドライブ名を選択します。



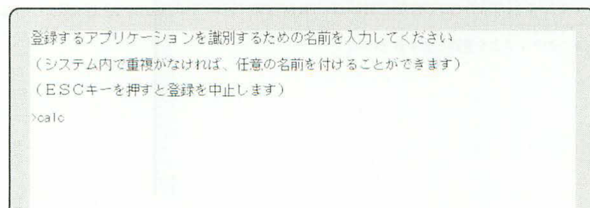
画面の一番下には、ドライブの一覧が表示されています。←→キーで目的のドライブ名（ここでは［B：］）を反転表示させ、⏎キーを押してください。

⑤　ドライブBに入れたフロッピィディスクを確認します。



画面には確認のメッセージが表示されます。ドライブBにセットしたフロッピィディスクを確認してください。よければ←→キーで［はい］を反転表示させて、⏎キーを押してください。ドライブBからドライブAへのファイルのコピーが始まります。
［いいえ］を選択して⏎キーを押すと、③の画面に戻ります。③からやり直してください。

⑥　アプリケーションを起動するためのバッチファイルの名前を入力します。

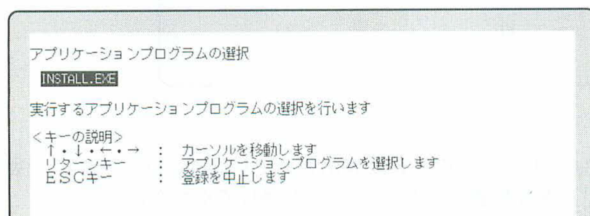


ファイルのコピーが終了したら、アプリケーションの起動に使うバッチファイルの名前を入力します。名前は8文字以内の英字で入力してください（大文字と小文字は区別しなくてもかまいません）。拡張子（.BAT）は必要ありません。



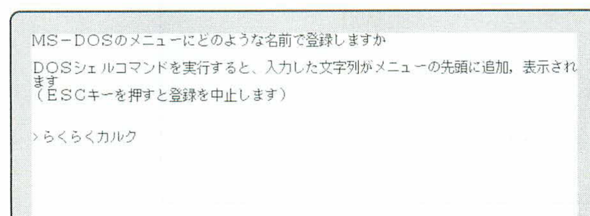
- バッチファイルについては、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「環境設定編 1.1.6 バッチファイルの作成と実行」を参照してください。
- 拡張子については、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「基本操作編 2.1.1 ファイル名のルール」を参照してください。

⑦ アプリケーションを起動するための実行ファイルを選択します。



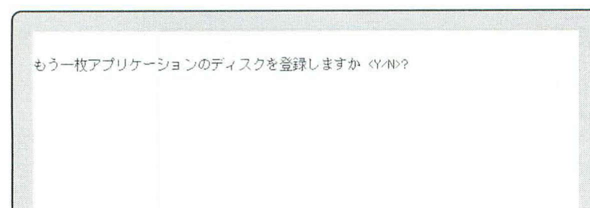
ここでは、インストールしたアプリケーションをDOSシェルから起動するための実行ファイルを指定します。実行ファイルの名前は、アプリケーション添付のマニュアルで確認してください。
該当する実行ファイルを↑↓←→キーで反転表示させ、⏎キーを押してください。

⑧ DOSシェルに登録するときの名前を指定します。



ここでは、DOSシェルのプログラム一覧に表示する名前を入力します。空白も含めて半角で23文字、全角で11文字以内の名前を入力し、⏎キーを押してください。そのアプリケーションが一目で識別できるように、わかりやすい名前をつけましょう。

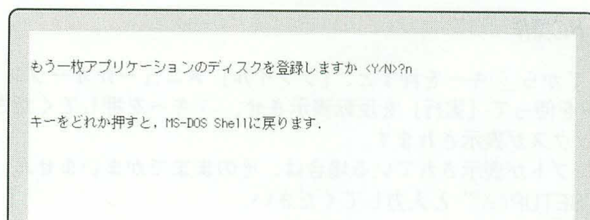
⑨ 2枚目以降のアプリケーションのオリジナルディスクをコピーします。



アプリケーションのオリジナルディスクが2枚以上の場合は、ドライブBに2枚目以降のディスクをセットして、Yキーを押します。⑤からの作業を繰り返してください。

アプリケーションのオリジナルディスクが1枚の場合、または最後のディスクのコピーが終わったら、[N]キーを押してください。

⑩ SETUPコマンド起動前の状態に戻ります。



アプリケーションのオリジナルディスクの内容をすべてコピーし終わると、固定ディスクでアプリケーションを使う準備は完了です。
①でDOSシェルからSETUPコマンドを起動した場合は、どれかキーを押すとDOSシェルの画面に戻ります。
コマンドプロンプトから実行した場合は、自動的にコマンドプロンプトに戻ります。

2.4.2 フロッピィディスクにインストールする場合

ここでは、SETUPコマンドを使ってアプリケーションをフロッピィディスクにインストールする方法を説明します。MAOIX方式でもそれ以外も、最初は同じように作業が始まります。途中から作業が分かれるので、よく注意して進めてください。

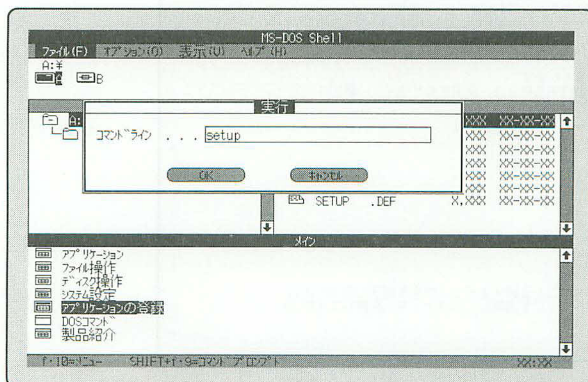
それでは、使用するフロッピィディスクをドライブにセットしておきましょう。
ドライブBには、「アプリケーションをインストールするフロッピィディスク」をセットします。このディスクは、なるべくMS-DOSの運用ディスクを使ってください。もしなければ、初期化していないディスクなどでもかまいません。
また、ドライブCには「アプリケーションのオリジナルディスク」をセットしてください。



ドライブCに相当する2台目のフロッピィディスクドライブがない場合は、フロッピィディスクドライブを増設してください。

準備ができたらコンピュータの電源を入れ、DOSシェルを起動してから作業を始めましょう。

① SETUPコマンドを実行します。





マウスの操作

まず［ファイル］メニューをクリックし、その中の［実行］をクリックしてください。
［実行］のダイアログボックスが表示されます。



キーボードの操作

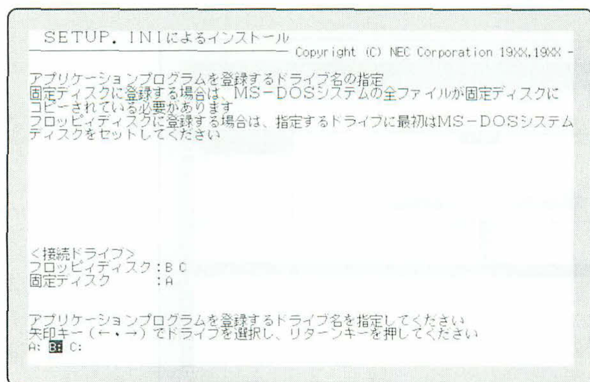
f·10キーを押してから⏎キーを押すと、［ファイル］メニューがオープンします。この状態で↑↓キーを使って［実行］を反転表示させ、⏎キーを押してください。［実行］のダイアログボックスが表示されます。
コマンドプロンプトが表示されている場合は、そのままでかまいません。
この状態で、“SETUP⏎”と入力してください。

② インストールの実行方式を選択します。



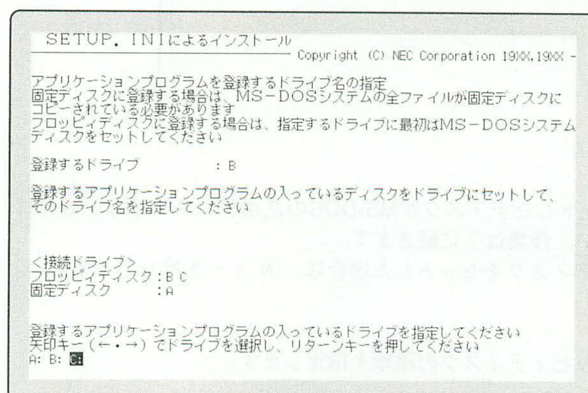
画面には、［iスクリプト一覧］と［SETUP.INIによるインストール］の2つが表示されています。
MAOIX方式で実行する場合は、↑↓キーで［iスクリプト一覧］を反転表示させます。［A：¥］の部分をBSキーで消して“C：¥”と入力してから、⏎キーを押してください。
以降は、画面の説明にしたがって作業を進めてください。
それ以外の場合は、［SETUP.INIによるインストール］を反転表示させ、⏎キーを押してください。作業は次の③に続きます。

③ インストール先のドライブ名を選択します。



画面の一番下には、ドライブの一覧が表示されています。[←][→]キーで目的のドライブ名（ここでは［B：］）を反転表示させ、[↵]キーを押してください。

④ アプリケーションのオリジナルディスクを入れるドライブ名を選択します。


SETUP．INIによるインストール
Copyright (C) NEC Corporation 19XX,19XX -

アプリケーションプログラムを登録するドライブ名の指定
固定ディスクに登録する場合は、MS－DOSシステムの全ファイルが固定ディスクにコピーされている必要があります
フロッピィディスクに登録する場合は、指定するドライブに最初はMS－DOSシステムディスクをセットしてください

登録するドライブ　　：B

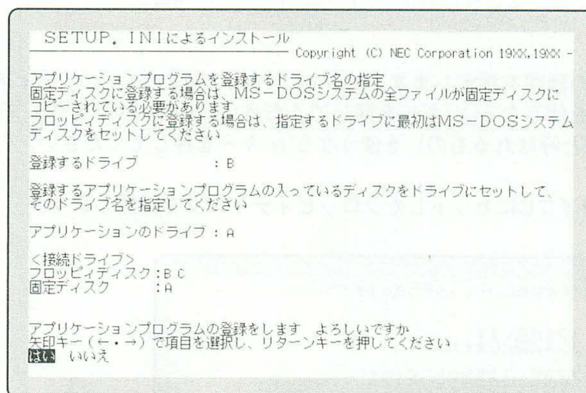
登録するアプリケーションプログラムの入っているディスクをドライブにセットして、そのドライブ名を指定してください

<接続ドライブ>
フロッピィディスク：B C
固定ディスク　　　：A

登録するアプリケーションプログラムの入っているドライブを指定してください
矢印キー（←・→）でドライブを選択し、リターンキーを押してください
A: B: C:

画面の一番下には、ドライブの一覧が表示されています。[←][→]キーで目的のドライブ名（ここでは［C：］）を反転表示させ、[↵]キーを押してください。

⑤ ドライブCに入れたフロッピィディスクを確認します。


SETUP．INIによるインストール
Copyright (C) NEC Corporation 19XX,19XX -

アプリケーションプログラムを登録するドライブ名の指定
固定ディスクに登録する場合は、MS－DOSシステムの全ファイルが固定ディスクにコピーされている必要があります
フロッピィディスクに登録する場合は、指定するドライブに最初はMS－DOSシステムディスクをセットしてください

登録するドライブ　　：B

登録するアプリケーションプログラムの入っているディスクをドライブにセットして、そのドライブ名を指定してください

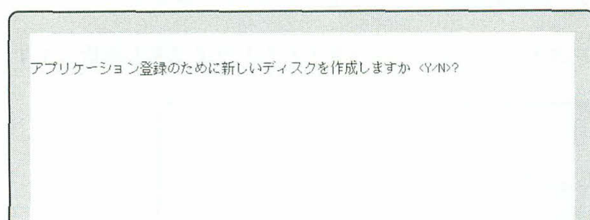
アプリケーションのドライブ：A

<接続ドライブ>
フロッピィディスク：B C
固定ディスク　　　：A

アプリケーションプログラムの登録をします　よろしいですか
矢印キー（←・→）で項目を選択し、リターンキーを押してください
はい　いいえ

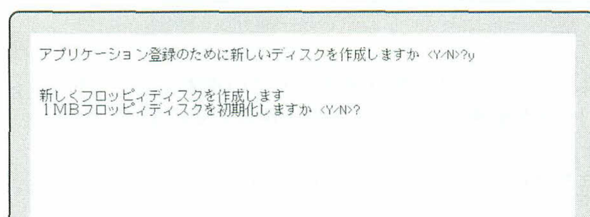
画面には確認のメッセージが表示されます。ドライブCにセットしたフロッピィディスクを確認してください。よければ[←][→]キーで［はい］を反転表示させて、[↵]キーを押してください。ドライブCからドライブBへのファイルのコピーが始まります。
ここで［いいえ］を選択して[↵]キーを押すと、③の画面に戻ります。

⑥ インストール先のディスクを初期化するかどうか指定します。



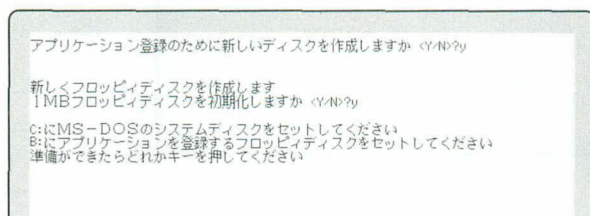
ドライブBにセットしたディスクがMS-DOSの運用ディスクでない場合は、ここでYキーを押してください。作業は⑦に続きます。
MS-DOSの運用ディスクをセットした場合は、Nキーを押してください。作業は⑩に進みます。

⑦ 初期化するフロッピィディスクの種類を指定します。



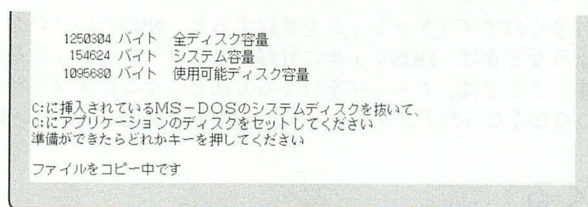
ここでディスクの種類を指定します。1Mバイトタイプのフロッピィディスク（「2HD」と呼ばれるもの）を使うならYキーを押してください。640Kバイトタイプのフロッピィディスク（「2DD」と呼ばれるもの）を使うならNキーを押してください。

⑧ ドライブBとドライブCにセットしたフロッピィディスクを確認します。



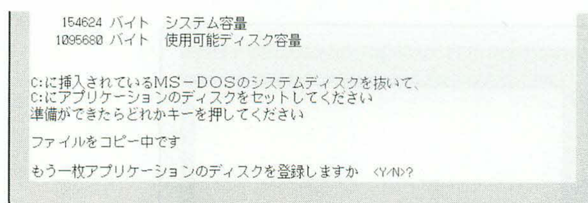
ドライブBにはアプリケーションをインストールするフロッピィディスクを、ドライブCにはアプリケーションのオリジナルディスクをセットしてあるかどうか、確認してください。
何かキーを押してしまうと、ドライブBに入れたディスクの初期化が始まります。一度初期化を始めてしまうと、そのディスクの内容はもとの状態に戻りません。
用意ができたら、どれかキーを押してください。ドライブBにセットしたフロッピィディスクの初期化が始まります。

⑨　アプリケーションのオリジナルディスクのファイルをコピーします。



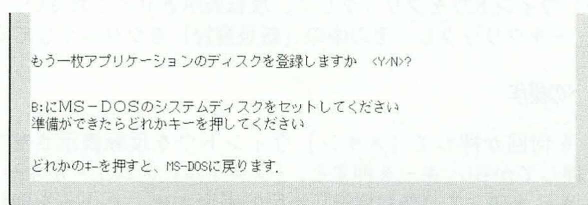
適当なキーを押すと、ドライブCのアプリケーションのオリジナルディスクからドライブBのディスクへ、すべてのファイルのコピーが始まります。

⑩　2枚目以降のディスクを処理するかどうか指定します。



ファイルのコピーが終わると、このような画面が表示されます。
アプリケーションのオリジナルディスクが2枚以上ある場合は、Yキーを押してください。
2枚目以降のディスクに対して、⑥（または⑧）からの作業を繰り返してください。
アプリケーションのオリジナルディスクが1枚の場合、または最後のディスクのコピーが終わったら、Nキーを押してください。

⑪　SETUPコマンド起動前の状態に戻ります。



①でDOSシェルからSETUPコマンドを起動した場合は、このような画面が表示されます。Yキーと⏎キーを押してください。もう一度どれかのキーを押すと、DOSシェルの画面に戻ります。
コマンドプロンプトからSETUPコマンドを起動した場合は、このメッセージは表示されずにコマンドプロンプトに戻ります。

これで、アプリケーションがフロッピィディスクにインストールされ、ドライブBに入っていたディスクは、アプリケーションの運用ディスクになっているはずです。アプリケーションの実行方法については、「第3章　アプリケーションの実行」を参照してください。

2.5 登録したアプリケーションを整理する

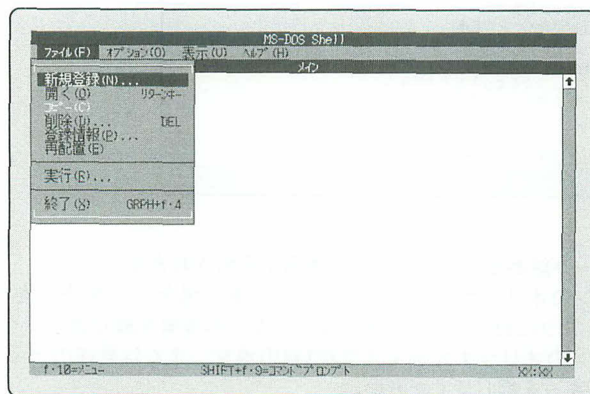
DOSシェルにあまり多くのアプリケーションを登録すると、使いたいプログラムを探すのがたいへんです。このようなときは、DOSシェルに登録したアプリケーションをグループに分けて整理すると便利です。ここでは、グループをつくる方法と、そこにアプリケーションをコピーする方法、そしていらなくなったアプリケーションを削除する方法を説明します。

2.5.1 グループをつくる

ここでは、新しくグループをつくる方法を説明します。準備ができたらコンピュータの電源を入れ、DOSシェルを起動してから作業を始めてください。

なお、作業手順の説明は“プログラム一覧”画面で行っていますが、“ファイル&プログラム一覧”画面でも手順は同じです。

① ［ファイル］メニューから［新規登録］を選択します。



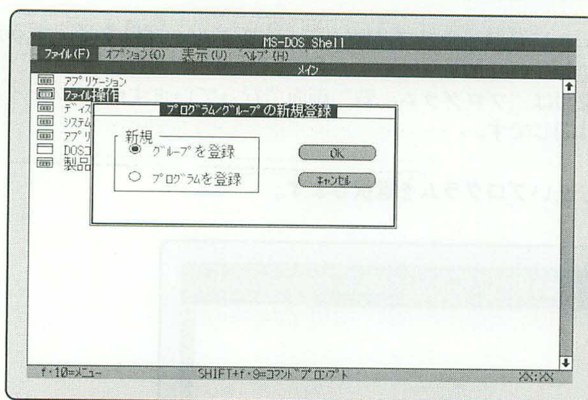
 マウスの操作

まず、［メイン］ウィンドウをクリックして、反転表示させてください。この状態で［ファイル］メニューをクリックし、その中の［新規登録］をクリックしてください。

 キーボードの操作

まず、TABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させてください。次に、f·10キーを押してから↵キーを押すと、［ファイル］メニューがオープンします。この状態で↑↓キーを使って［新規登録］を反転表示させ、↵キーを押してください。

② ［グループを登録］を選択します。



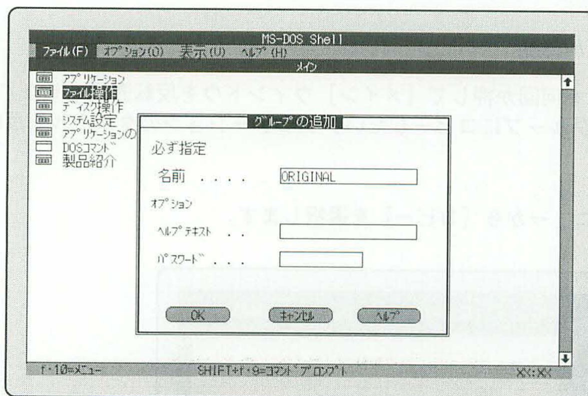
 マウスの操作

［グループを登録］をクリックして先頭の○を反転表示させ、［了解］をクリックしてください。

 キーボードの操作

↑↓キーを使って［グループを登録］の先頭の○を反転表示させ、⏎キーを押してください。

③ グループのタイトルを指定します。



［名前］の欄にグループの名前を入力してください。そのグループを一目で識別できるように、わかりやすい名前にしましょう。入力したら、⏎キーを押してください。ダイアログボックスが消えます。

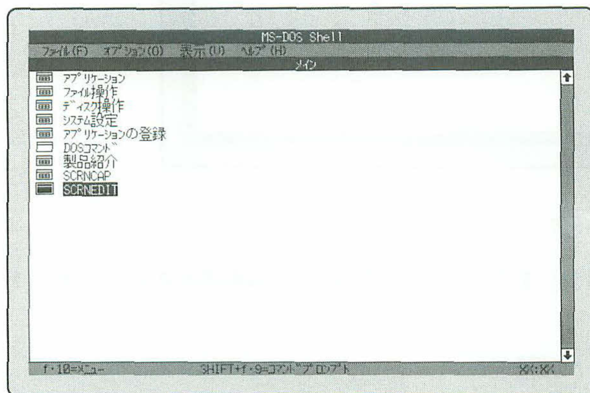
これで、［メイン］ウィンドウのプログラム一覧には、新しいタイトルのグループのアイコンが追加されているはずです。

2.5.2 アプリケーションをグループにコピーする

ここでは、DOSシェルに登録したアプリケーションをグループにコピーする方法を説明します。DOSシェルを起動してから作業を始めてください。

なお、作業手順の説明は“プログラム一覧”画面で行っていますが、“ファイル&プログラム一覧”画面でも手順は同じです。

① グループに登録したいプログラムを選択します。



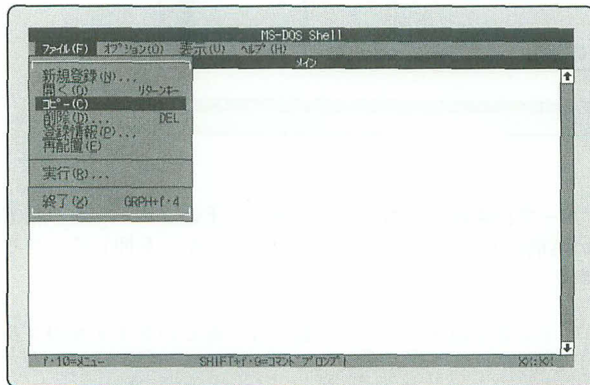
マウスの操作

プログラム一覧を見て、グループにコピーしたいアプリケーションのタイトルをクリックして、反転表示させてください。

キーボードの操作

まず、TABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させます。次に↑↓キーを使って、グループにコピーしたいアプリケーションのタイトルを反転表示させてください。

② ［ファイル］メニューから［コピー］を選択します。



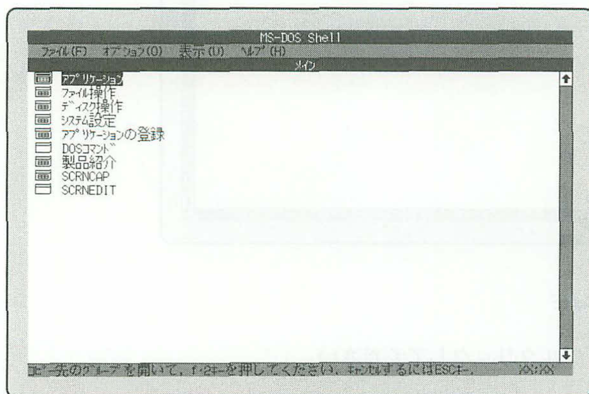
マウスの操作

［ファイル］メニューをクリックし、その中の［コピー］をクリックしてください。


キーボードの操作

f·10キーを押してから⏎キーを押すと、［ファイル］メニューがオープンします。この状態で↑↓キーを使って［コピー］を反転表示させ、⏎キーを押してください。

③ コピー先のグループをオープンします。



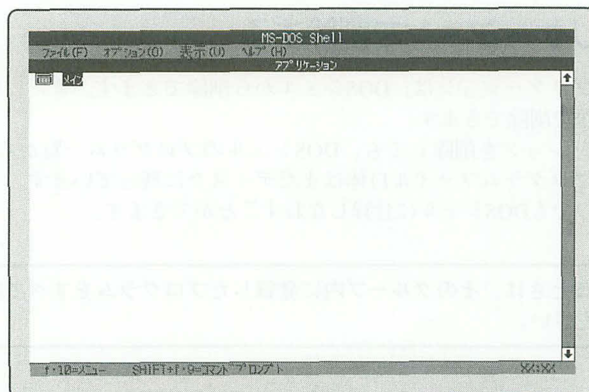

マウスの操作

プログラム一覧にある、コピー先のグループをダブルクリックしてください。


キーボードの操作

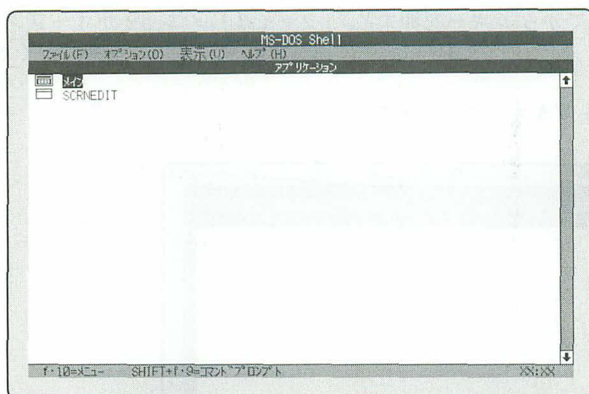
まず、TABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させます。次に、↑↓キーを使ってコピー先のグループを反転表示させ、⏎キーを押してください。

④ f·2キーを押します。



グループがオープンすると、このような画面になります。この状態でf·2キーを押してください。①で選択したアプリケーションがプログラム一覧に表示されたら成功です。

⑤　［メイン］を選択してもとの画面に戻ります。



マウスの操作

［メイン］をダブルクリックしてください。

キーボードの操作

↑↓キーを使って［メイン］を反転表示させ、⏎キーを押してください。

これで、もとの画面に戻りました。

①からの操作を繰り返すと、他のアプリケーションもグループにコピーできます。ここでは「コピー」しただけなので、もとのアプリケーションはグループの外に残っています。もしグループの外にあるプログラムが必要なければ、削除することもできます。その方法については、次の「2.5.3　登録したアプリケーションを削除する」を参照してください。

2.5.3 登録したアプリケーションを削除する

いらなくなったアプリケーションは、DOSシェルから削除できます。また、いらなくなったグループも同様の操作で削除できます。

登録したアプリケーションを削除しても、DOSシェルのプログラム一覧から消えるだけで、アプリケーションのプログラムファイル自体はまだディスクに残っています。したがってまた必要になったら、いつでもDOSシェルに登録しなおすことができます。

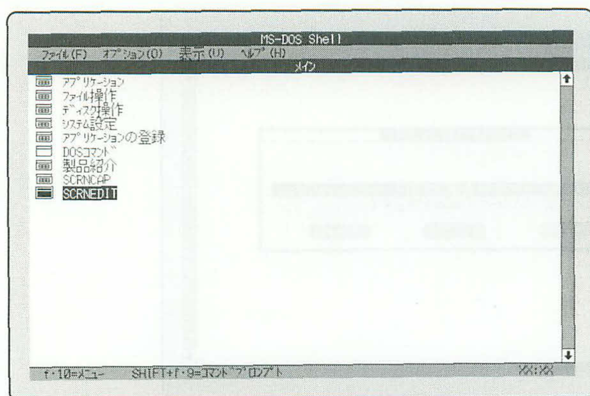


グループを削除するときは、そのグループ内に登録したプログラムをすべて削除して、中身を空にしておいてください。

ここでは、いらなくなったアプリケーションをDOSシェルのプログラム一覧から削除する方法を説明します。DOSシェルを起動してから作業を始めてください。

なお、作業手順の説明は“プログラム一覧”画面で行っていますが、“ファイル＆プログラム一覧”画面でも手順は同じです。

① 削除したいアプリケーション（またはグループ）を選択します。



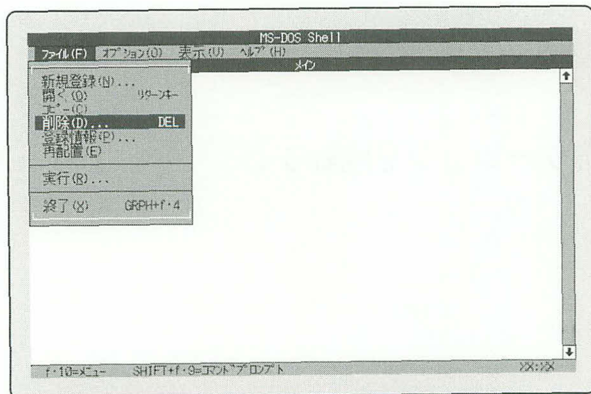

マウスの操作

［メイン］ウィンドウのプログラム一覧で、削除したいアプリケーションのタイトルをクリックして反転表示させてください。


キーボードの操作

TABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させます。次に↑↓キーを使って、削除したいアプリケーションを反転表示させてください。

② ［ファイル］メニューから［削除］を選択します。



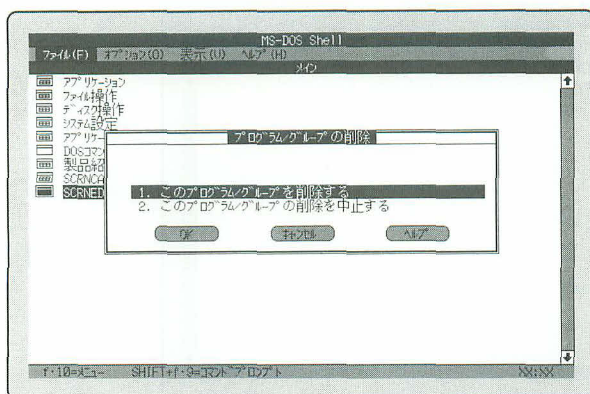

マウスの操作

［ファイル］メニューをクリックし、その中の［削除］をクリックしてください。


キーボードの操作

f･10キーを押してから↵キーを押すと、［ファイル］メニューがオープンします。次に↑↓キーを使って［削除］を反転表示させ、↵キーを押してください。

③　[1.このプログラム／グループを削除する] を選択します。



マウスの操作

[1.このプログラム／グループを削除する] をクリックして反転表示にし、[了解] をクリックしてください。

キーボードの操作

↑↓キーを使って [1.このプログラム／グループを削除する] を反転表示させ、⏎キーを押してください。

これで、①で選択したアプリケーション（またはグループ）がプログラム一覧から消えたら成功です。

第　3　章

MS-DOS 6.2 INSTALL GUIDE

THREE

アプリケーションの実行

インストールしたアプリケーションは、DOSシェルからでもコマンドプロンプトからでも起動できます。また、特定の拡張子を持つファイルを特定のアプリケーションと「関連づけ」しておけば、そのファイルをマウスでダブルクリックするだけで実行できます。

アプリケーションの実行方法は、DOSシェルから実行する場合、コマンドプロンプトから実行する場合、アプリケーションをファイルに関連づけて実行する場合の3通りに分けて説明します。どの方法が使いやすいか、試してみてください。

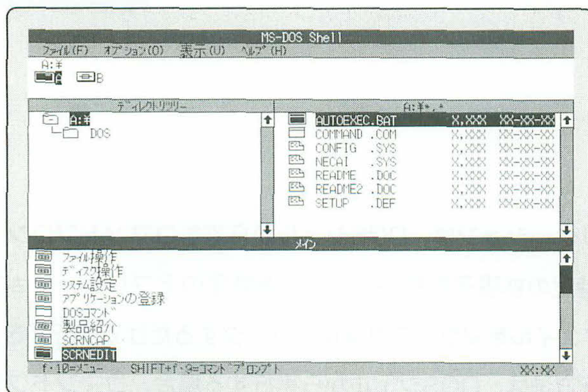
3.1 DOSシェルからのアプリケーションの実行

ここでは、アプリケーションをDOSシェルから実行する方法を説明します。DOSシェルを起動してから操作します。



DOSシェルの起動方法については、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「基本操作編 1.2 DOSシェルの起動と終了」を参照してください。

① DOSシェルからアプリケーションを実行します。



マウスの操作

プログラム一覧で、起動したいアプリケーションを探します。見つけたら、そのアプリケーションのタイトルをダブルクリックしてください。

キーボードの操作

まず、TABキーを何回か押して［メイン］ウィンドウを反転表示させます。次に、↑↓キーを使って実行したいアプリケーションを反転表示させ、⏎キーを押してください。

簡単にアプリケーションを起動できました。起動したあとの操作については、アプリケーション添付のマニュアルを参照してください。

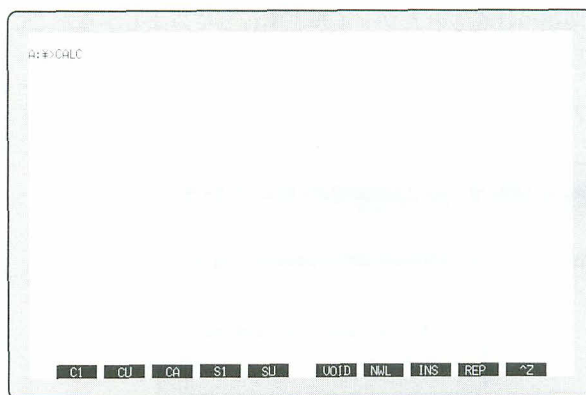
3.2 コマンドプロンプトからのアプリケーションの実行

インストールしたアプリケーションは、コマンドプロンプトから実行することもできます。コマンドプロンプトから実行する場合は、アプリケーションを起動するためのコマンドをキーボードから入力します。このときに入力するコマンドはアプリケーションによって異なりますので、アプリケーション添付のマニュアルで確認してください。



ここでDOSシェルの画面が表示されている場合は、まずコマンドプロンプトを表示させましょう。SHIFTキーを押したままf·9キーを押すと、コマンドプロンプトが表示されます。また、GRPHキーを押したままf·4キーを押すと、DOSシェルが終了します。

① アプリケーションをコマンドプロンプトから実行します。



コマンドプロンプトが表示された状態で、アプリケーションの実行コマンドを入力します。

簡単にアプリケーションを起動できました。起動したあとの操作については、アプリケーション添付のマニュアルを参照してください。

3.3 関連づけで簡単起動

DOSシェルには、特定の名前（拡張子）を持つファイルにアプリケーションを関連づけをする機能があります。これは、あるファイルをいつも決まったアプリケーションでオープンしたいときに利用すると便利です。

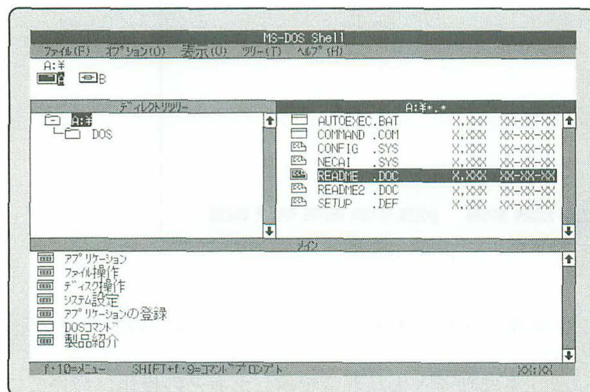
たとえば、ファイル名に「.DOC」とつくファイルは、いつも「SEDIT」というエディタ（これは本バージョンに標準添付しています）で実行するように関連づけをされています。ですから、DOSシェルの「ファイル表示ウィンドウ」で「.DOC」のつくファイルをダブルクリックするだけで、SEDITが起動すると同時にそのファイルがオープンします。



拡張子については、『MS-DOS 6.2 ユーザーズマニュアル』の「基本操作編　2.1.1 ファイル名のルール」を参照してください。

それでは、実際に関連づけをされたファイルを実行してみましょう。ここでは、例として“README.DOC”ファイルを実行します。

① 関連づけされたファイルを実行します。



 マウスの操作

まず、ファイル表示ウィンドウのタイトルが［A：¥＊.＊］となっていることを確認します。次に、ファイル一覧で関連づけをされたファイル（ここでは“README.DOC”）をダブルクリックしてください。

 キーボードの操作

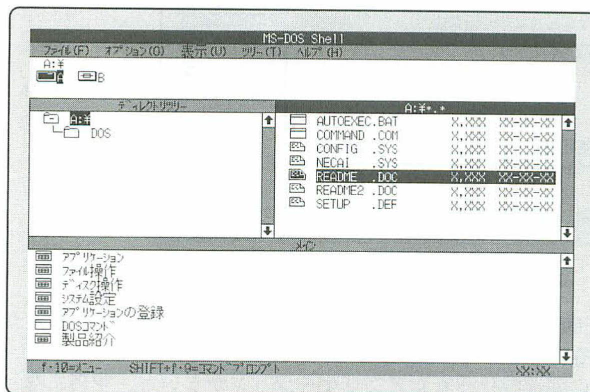
TABキーを何回か押してファイル表示ウィンドウを反転表示させます。このとき、ファイル表示ウィンドウのタイトルが［A：¥＊.＊］となっていることを確認してください。次に、↑↓キーを使って関連づけをされたファイル（ここでは“README.DOC”）を反転表示させ、⏎キーを押してください。



ここで起動したSEDITの編集画面で何もせずに終了するには、まずf･1キーを押します。メニューが表示されますから、↓キーで［ファイルをセーブせず編集終了］を反転させて⏎キーを押してください。

続いて、関連づけの設定方法を説明します。
ここでは、例としてアプリケーション「SEDIT」とファイル“README.DOC”の関連づけを見てみます。実際にファイルとアプリケーションの関連づけをするときも、同じように操作してください。

① 関連づけしたいファイル（ここでは“README.DOC”）を選択します。



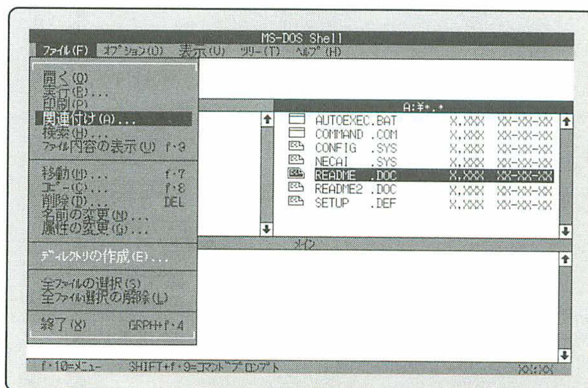
マウスの操作

ファイル表示ウィンドウのファイル一覧で、関連づけをしたいファイル（ここでは“README.DOC”）をクリックして反転表示させてください。

キーボードの操作

まず、TAB キーを何回か押してファイル表示ウィンドウを反転表示させます。次に、↑↓キーを使って、関連づけをしたいファイル（ここでは“README.DOC”）を反転表示させてください。

② ［ファイル］メニューの［関連付け］を選択します。



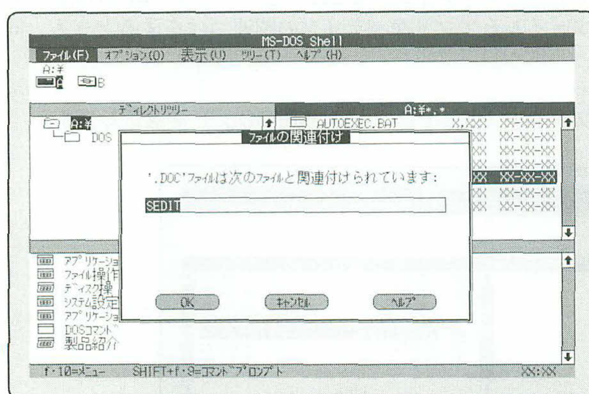
マウスの操作

まず［ファイル］メニューをクリックし、その中の［関連付け］をクリックしてください。

キーボードの操作

f･10キーを押してから⏎キーを押すと、［ファイル］メニューがオープンします。この状態で、↑↓キーを使って［関連付け］を反転表示させ、⏎キーを押してください。

③ 関連づけをしたいアプリケーションを指定します。



この場合は［SEDIT］と表示されています。これは、「.DOC」ファイルが「SEDIT」と関連づけられていることを示しています。
この欄は、すでに関連づけられたアプリケーションがないと、空白になっています。関連づけをしたいアプリケーションの実行コマンドを入力してください。

第　4　章

MS-DOS 6.2 INSTALL GUIDE

FOUR

MS-DOS 6.2をお使いになる際の注意

ここでは、MS-DOS 6.2をお使いになるにあたってとくに注意していただきたいことや、他のマニュアルでは取り上げられていない事項をまとめて説明します。

4.1 全般にわたっての注意事項

まず、MS-DOS 6.2を使用するにあたっての全般的な注意点をまとめます。

・市販ソフトウェアの中には、使用できる日本語MS-DOSのバージョンを限定しているものがあります。

・ソフトウェアによっては、一部動作不良を起こすものがあります。たとえば、コピーを防止するための“プロテクト”がかかったソフトウェア、システムの情報を直接参照しているソフトウェア、EMS/XMS、DPMI以外の方法で拡張メモリを使用しているソフトウェア、などです。

・アプリケーションをご使用の際にメモリが不足する場合は、DOSシェルから実行しないようにする、MOUSE、PRINT、DOSKEYなどのメモリに常駐するコマンドの常駐部分を取り外す、などの方法でメモリを空けてください。

・MS-DOS 6.2のEMSドライバ（EMM.SYSとEMM386.EXE）において、ノーマルモードでページフレームアドレスを指定しないときのアドレスのデフォルトがC0000Hに変更されています。

4.2 DoubleSpaceを利用する場合

・コマンドラインパラメータについて

DoubelSpaceにコマンドラインパラメータを指定して起動する場合は、必ずセットアップを行ってから実行してください。

・圧縮ドライブの認識

フロッピィディスク起動、および他のOSやバージョン6.2以外のMS-DOS使用時には、圧縮ドライブの認識はできません。次のような場合には、非圧縮ドライブで運用するようにしてください。

・フロッピィディスク起動でインストールを行うアプリケーションソフトを使用する場合
・フロッピィディスクのみで運用を行うアプリケーションソフトを使用する場合
・他のOSやバージョン6.2以外のMS-DOSを使用する場合

・他のディスク圧縮プログラムとの関係

DoubelSpaceが実行されている場合、他のディスク圧縮プログラムを実行すると、DoubelSpaceのディスク管理と他の圧縮プログラムのディスク管理の処理が衝突するため、正しく動作できません。このため、DoubelSpaceを使用している場合は、他のディスク圧縮プログラムは使用しないでください。また、他のディスク圧縮プログラムを使用している場合は、DoubelSpaceのセットアップを行わないでください。

・圧縮ドライブのサイズ

DoubleSpaceで圧縮できるドライブ上のファイルの合計容量は、最大512Mバイトです。

・論理セクタのサイズ

DoubleSpaceを利用するためには、お使いの固定ディスクのセクタ長が512バイトであることが必要です。もし、これ以外のセクタ長で固定ディスクがフォーマットされている場合はDoubleSpaceはお使いいただけません。お使いになるには、あらかじめDBLTRANSコマンドを実行後に再起動し、圧縮してください（ただし、物理セクタのサイズが256バイトの固定ディスクでは、DBLTRANSコマンドを実行できません）。なお、DBLTRANSコマンドについてはHELPコマンドを参照してください。

・仮想ドライブ、交換可能メディアでの制限

DoubleSpaceは、ASSIGN、SUBST、JOINコマンドで設定された仮想ドライブの圧縮は行うことができません。また、光ディスクなどの交換可能な記録メディアでの圧縮は行うことができません。あらかじめご了承ください。

・起動パーティションの設定

DoubleSpaceを実行する際は、必ず起動パーティションを自動起動に設定してください。

・複数ドライブを使用する場合

DoubleSpace実行後にドライブ構成を変更すると、圧縮ドライブが見えなくなる場合があります。これは、たとえばドライブA、ドライブB、ドライブCまでの、複数の固定ディスクの領域を利用している場合に、ドライブBを削除すると発生します。これは、圧縮ドライブが保存しているドライブ情報が無効になるために発生する現象で、構成を変更する前に圧縮を解除し、構成変更後に再び圧縮することによって回避することができます。

なお、ドライブの新規の追加は、最初の圧縮ドライブから4ドライブ目まで可能です。

・削除ファイルの復活

削除セントリ、または削除追跡にて削除ファイルの保護を行っているドライブに対し、DoubleSpaceを実行した場合、DoubleSpace実行前の削除ファイルは復活できません。

4.3 MemMakerを利用する場合

・起動パーティションの設定

MemMakerを実行する際は、必ず起動パーティションを自動起動に設定してください。

4.4 DPMIを利用する場合

・メモリドライバの組み込み

DPMI機能を利用する場合は、HIMEM.SYSとEMM386.EXEを組み込む必要があります。

・UMBとの関係

DPMIが常駐している間は、UMB領域が使用できなくなりますが、DPMIを常駐する前にUMB領域へ読み込んだコマンドやデバイスドライバは、DPMI常駐時にも正しく動作します。

・EMM386.EXEのスイッチ

DPMIを利用するためには、あらかじめEMM386.EXEに“／DPMI”と16ページ以上のEMS領域（／P=16以上）スイッチをつける必要があります。

4.5 2HD（1.44Mバイト）フロッピィディスク

1.44Mバイトの3.5インチフロッピィディスクに対応しているドライブでは、2HD（1Mバイト）、2DD（640Kバイト）フロッピィディスクに加え、2HD（1.44Mバイト）フロッピィディスクの読み書きができます。これらのフロッピィディスクは、自動的に種類が判別され読み書きができます。しかし、5インチフロッピィディスクドライブ、あるいは1.44Mバイトに対応していないPC-9800シリーズでは、2HD(1.44Mバイト)フロッピィディスクの読み書きはできません。

4.6 RS-232C 19,200bps使用上の注意

MS-DOS 6.2では、RS-232Cインタフェースの通信速度として19,200bpsをサポートしています。お使いのコンピュータが19,200bpsに対応したRS-232Cインタフェースを搭載しているかについては、本体付属のガイドブックで確認してください。

4.7 マルチメディア対応ドライバ

ウィンドウズアクセラレータボードを搭載していない場合でも、256色同時発色可能なコンピュータでは、"拡張グラフィックドライバ"が利用可能です。また、PCM音源を標準で搭載しているコンピュータ、またはPC-9801-86、PC-9801-73などのサウンドボードを取り付けてあるコンピュータでは"拡張サウンドドライバ"が利用可能です。

"拡張グラフィックドライバ"と"拡張サウンドドライバ"をあわせて"マルチメディア対応ドライバ"と呼び、上記の機能に対応しているコンピュータで使用することが可能です。マルチメディアアプリケーションを利用する場合、必要に応じてMS-DOSに組み込んでください。

なお、PC-9801GSをご使用の場合、拡張グラフィックドライバと拡張サウンドドライバは、PC-9801GS添付のドライバをご使用ください。

4.8 Windowsとの関係

MS-DOS 6.2上でWindows 3.1をご使用になる場合は、次の点にご注意ください。

・Windows 3.1をお使いの場合、次のデバイスドライバは、MS-DOS 6.2に添付のものを使用してください。

HIMEM.SYS
SMARTDRV.EXE
RAMDISK.SYS（RAMDRIVE.SYS）
EMM386.EXE

・Windowsで、かな漢字変換方式として「MS-KANJIインタフェースかな漢字変換」を使用する場合は、MS-DOS 6.2に添付のかな漢字変換ドライバ（NECAIK1.DRV、NECAIK2.DRV）をCONFIG.SYS（またはWINSTART.BAT）ファイルで組み込んでください。WINSTART.BATについては、Windowsに添付のマニュアルをご覧ください。

4.9 MSDコマンドについて

MS-DOS 6.2とWindows 3.1をお使いのお客様でMSDコマンドをご使用の場合、Windows 3.1添付のMSDコマンド（Version 2.00）が起動される場合があります。この場合、絶対パス名で起動するか、AUTOEXEC.BATのPATHの設定中で、MS-DOS 6.2をインストールしたディレクトリを先に指定するようにしてください。MS-DOS 6.2のMSDコマンド（Version 2.00）が起動されます。

例：絶対パス名での起動方法

```
A：¥DOS¥MSD
    ↑
    └ MS-DOS 6.2をインストールしたディレクトリ
```

MS-DOS 6.2

MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2
MS-DOS 6.2